東広島市教育委員会文化財調査報告書　第48集

友松2・3号遺跡発掘調査報告書

－ビバーチェ寺家宅地造成工事に係る発掘調査－

２０１４

東広島市教育委員会

友松2・3号遺跡発掘調査報告書
二〇一四
東広島市教育委員会

友松２・３号遺跡発掘調査報告書

－ビバーチェ寺家宅地造成工事に係る発掘調査－

２０１４

東広島市教育委員会

は　し　が　き

広島県のほぼ中央に位置する東広島市は、「未来にはばたく国際学術研究都市－ともに育み、人が輝くまち－」を将来の都市像とし、環境と調和した生活しやすいまち、安全で安心な暮らしを地域で支えあうまちなどの目標を掲げ、住みよい都市空間の形成を目指しているところです。これまでに整備された道路、駅等の既存施設はもとより、これからのあらたな整備により、これまで以上に利便性の高いコンパクトな市街地の形成や本市の特徴ある自然環境を活かした新しいライフスタイルに対応できる魅力のある住環境の形成など、これからの時代に対応したまちづくりを進めているところです。

この中には都市計画マスタープランとして地域別構想における西条地域拠点の整備方針があり、その一つとして寺家新駅周辺市街地整備事業があります。これは、新駅設置に伴うアクセス確保のための駅前広場等を整備し、駅利用者の利便性の向上を図る。さらには新駅周辺において土地区画整理事業や地区計画整備事業等により、計画的な市街地形成を図ることで、新駅設置と連携しながら寺家地区の都市機能の強化を図ることとしています。そして、地区計画整備事業については、地区計画決定を行い、地区計画の目標及び土地利用の方針に基づき進められているところです。

そうした中、その市街地整備の進む西条町寺家において、ビバーチェ寺家宅地造成工事に伴い、友松2・3号遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、友松2号遺跡では、弥生時代のものと思われる溝状遺構や土坑、中世頃と思われる溝状遺構が検出され、友松3号遺跡からは、弥生時代前期の溝状遺構、古墳時代の住居址、中世頃と思われる土坑や溝状遺構などが検出されました。また、両遺跡ともに良好な遺物包含層があり、弥生時代から古墳時代、中世に及ぶ時期の遺物が出土したことから、当地には同時代の集落跡が広がっていたことが確認されました。

本報告書が、郷土の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と関心をより一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施・報告書の刊行にあたり、関係各機関並びに地元関係者各位には、多大なご協力とご理解をいただきました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月

東広島市教育委員会
教育長　木　村　　清

例　　言

1. 本書は、平成23（2011）年度及び平成24（2012）年度に発掘調査を実施した友松２号遺跡、友松３号遺跡（広島県東広島市西条町寺家所在）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、サンユープランニング株式会社からの委託を受けて東広島市教育委員会が実施した。

3. 発掘調査及び基礎整理（平成23年度・平成24年度）は生涯学習部文化課主査吉野健志が行い、整理・報告書作成作業（平成25年度）は文化課主事津田真琴と埋蔵文化財調査員吉田由弥、杉原弥生が担当し、文化課職員一同が協力して行った。

4. 遺構の写真撮影･実測･製図は吉野が行い、遺物の実測･製図は吉田･杉原が行った。また、遺物の写真撮影は杉原が行った。

本書の執筆は、津田が（Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ）を、杉原が（Ⅱ、遺物観察表）を執筆し、津田が編集した。

4. 第1図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。

5. 第2図は、東広島市発行の1/2,500 東広島市地形図（O-7）を使用した。

6. 遺物実測図に付した遺物番号と写真図版に付した遺物番号は同一である。

7. 本書で使用した方位は、第1図が旧平面直角座標第Ⅲ系座標北で、ほかが世界測地系座標北（平面直角座標第Ⅲ系）である。

8. 調査で得られた遺物、図面、写真等の資料は、すべて東広島市教育委員会で保管している。

9. 本書に使用した遺構の表示記号は次のとおりである。
SB：竪穴住居跡　SK：土坑・貯蔵穴　SD：溝状遺構

友松２・３号遺跡発掘調査報告書

目　　次

Ⅰ　はじめに…… 1

Ⅱ　位置と環境…… 2

Ⅲ　調査の概要…… 6

Ⅳ　遺構と遺物…… 9

Ⅴ　まとめ…… 33

奥付・抄録

挿 図 目 次

第１図　周辺遺跡分布図（1:25,000）…… 3

第２図　遺跡位置図（1:2,500）…… 6

第３図　遺構配置図（1:400）…… 7

第４図　友松２号遺跡１区 No.101・102・103・107実測図（平面-1:80, 断面-1:40）……10

第５図　友松２号遺跡２区 No.202・208・209実測図（1:40）……11

第６図　友松２号遺跡３区 No.303～306・４区 No.402・403・405実測図（1:40）……12

第７図　友松２号遺跡４区 No.401実測図（1:40）……15

第８図　友松２号遺跡出土遺物実測図（1:3）……16

第９図　友松３号遺跡１区 No.1・3実測図（1:40）……19

第10図　友松３号遺跡１区 No.2・4実測図（1:40）……20

第11図　友松３号遺跡１区 No.5実測図（1:40）……20

第12図　友松３号遺跡２区 No.1・4・5実測図（1:40）……22

第13図　友松３号遺跡２区 No.2実測図（1:40）……23

第14図　友松３号遺跡２区 No.3・6～8実測図（No.3・7・8-1:40、No.6-1:20）……24

第15～19図　友松３号遺跡出土遺物実測図１～５（1:3）…… 26～30

図 版 目 次

扉　友松2・3号遺跡から北東の竜王山系をのぞむ

友松2号遺跡

図版1 a　遺跡調査前風景（南東から）

b　遺跡完掘全景（南東から）

図版2 a　1区溝状遺構 No.101・102完掘（南から）

b　1区溝状遺構 No.101・102断面（南から）

c　1区土坑 No.103（北から）

図版6　友松2号遺跡出土遺物

友松3号遺跡

図版3 a　1区完掘全景（南西から）

b　2区完掘全景（南西から）

図版4 a　1区溝状遺構 No.1・土坑 No.1-4完掘（南西から）

b　1区竪穴住居跡 No.2完掘（北西から）

c　1区住居内土坑 No.4完掘（南東から）

d　1区溝状遺構 No.3完掘（南西から）

図版5 a　2区竪穴住居跡 No.1・溝状遺構 No.4・土坑 No.5完掘（南西から）

b　2区竪穴住居跡 No.2完掘（東から）

c　2区竪穴住居跡 No.3・溝状遺構 No.7完掘（北東から）

図版7～10　友松3号遺跡出土遺物1～4

表　目　次

第1表　友松2号遺跡遺物観察表 ……17

第2表　友松3号遺跡遺物観察表 ……31

Ⅰ　はじめに

平成23（2011）年9月9日付けで、サンユープランニング株式会社代表取締役山下雄司（以下、「事業者」という。）から東広島市西条町寺家字友松（約6,672㎡）で宅地造成工事を行うため、計画地の文化財等の有無及び取扱いについての協議が東広島市教育委員会（以下、「市教委」という。）にあった。市教委が当該計画地の分布調査を実施した結果、弥生時代の集落跡である友松遺跡などが、計画地周辺の狭い範囲に分布していることから、全域について試掘調査が必要な旨を同年9月14日付けで回答した。その後、9月28日付けで事業者から試掘調査の依頼があり、10月4日および10月6日に試掘調査を実施した。その結果、計画地南半で弥生時代および中世の集落跡を確認した。このため10月23日付けで、計画地のうち遺構が確認された範囲（約1,200㎡）につき、「友松２号遺跡」が存在する旨を事業者に回答した。

その後の事業者との間で宅地部分は盛土保存、道路部分と上下水道部分（約420㎡）を発掘調査する方針で調整し、平成24（2012）年1月12日付けで事業者から埋蔵文化財の発掘の届けが市教委に提出された。市教委は同年1月16日付けで事業者に埋蔵文化財の発掘について通知した。1月16日付けで事業者から市教委に対し「ビバーチェ寺家宅地造成工事に係る埋蔵文化財の発掘調査」の依頼が提出された。市教委は1月23日付けで事業者に発掘調査を実施する旨を回答し、両者の間で発掘調査の委託契約が締結された。発掘調査（現地調査）は、同年2月29日から3月22日まで実施した。なお、整理作業・報告書作成は平成25（2013）年度に実施することとした。

また、この発掘調査（現地調査）の期間中の平成24年3月16日付けで事業者から今回の宅地造成工事を南側に拡張（約3,672㎡）するため、文化財等の有無及び取扱いについての協議が提出され、その全域について試掘調査が必要な旨を同年3月16日付けで回答した。その後、3月28日付けで事業者から試掘調査の依頼があり3月28日および3月29日に試掘調査を実施した。その結果、計画地北東半で、弥生時代～中世の集落跡を確認した。このため同年4月13日付けで、計画地のうち遺跡が確認された範囲（約2,000㎡）について、「友松３号遺跡」が存在する旨を回答した。

その後、事業者との間で友松２号遺跡と同様に宅地部分は盛土保存、道路部分と上下水道部分（420.06㎡）を発掘調査する方針で協議を行い、8月31日付けで事業者から埋蔵文化財の発掘の届けが市教委に提出された。市教委は9月5日付けで事業者に埋蔵文化財の発掘について通知した。そして平成25（2013）年1月8日付けで事業者から、市教委に対し「ビバーチェ寺家宅地造成工事に係る埋蔵文化財の発掘調査」の依頼が提出された。市教委は1月10日付けで事業者に発掘調査を実施する旨を回答し、両者の間で発掘調査の委託契約が締結された。発掘調査（現地調査）は、1月24日から2月15日まで実施した。整理作業・報告書作成は平成25（2013）年度に実施した。

本報告書は、以上のような経過を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。なお、今回の調査では、サンユープランニング株式会社代表取締役山下雄司氏をはじめとして地元の方々には多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

Ⅱ　位置と環境

東広島市は、広島県南部のほぼ中央に位置している。広島市の東に隣接し、北は安芸高田市と三次市、東は三原市と世羅郡世羅町、南東は竹原市、南西は呉市、安芸郡熊野町と接する。また、市の中心部と県内の主要都市とは、直線距離で概ね60㎞以内の距離にあり、県内各方面からのアクセスが良好な立地条件にある。近年は、広島大学を中心とした国際学術研究都市を目指し、交通網の整備や住宅団地の建設など諸開発が進められている。また、周囲は標高500ｍ～900ｍの低丘陵に囲まれており、標高200ｍ～400ｍの西条盆地が大部分を占めているが、盆地の南西部を中心に沖積地が広がるため比較的平坦地に恵まれている。南東部は瀬戸内海に面していることから、沿岸部沿いに小規模な沖積地が広がっている。

友松２・３号遺跡は、東広島市西条町寺家に所在する。遺跡は西条盆地の北部にある龍王山（標高575ｍ）の南西方向に延びる低丘陵上、その途上にある郡八幡神社から南へ下った山裾の微高地に立地している。調査前の状況は水田及び宅地で、遺跡から西側には黒瀬川が流れており、周辺との比高差が1ｍ前後である。本遺跡の周辺は諸開発が多く実施されており、ＪＲ山陽本線寺家新駅設置に伴う住宅団地造成工事やアクセス道路の新設及び改良工事が急増している。現在、寺家周辺の地域は山陽自動車道とＪＲ山陽本線、国道２号線及び486（旧国道２）号線と国道375号線が交差する交通の要衝でもある。

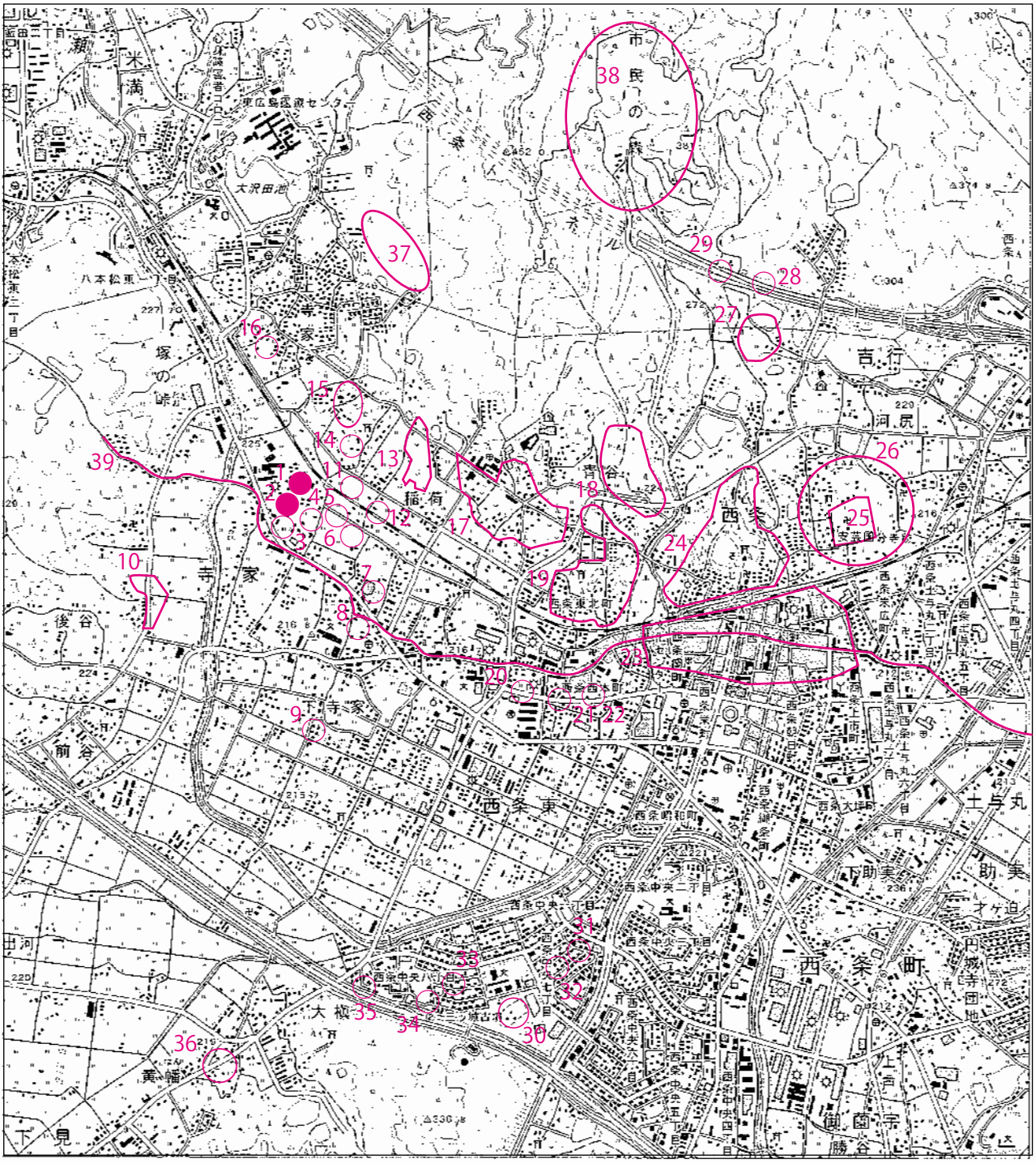
次に本遺跡周辺の遺跡について概観する。

［旧石器・縄文時代］

旧石器時代から縄文時代の遺跡の確認は少なく、広島大学構内の西ガガラ遺跡[1]からナイフ形石器や後期旧石器時代に比定される住居跡が検出されている。このほか山陽自動車道沿いの五楽遺跡や鐘鋳原池遺跡などで旧石器や縄文土器が採集されている。

［弥生時代］

弥生時代前期では、黄幡１号遺跡[2]から土器とともに多量の木製品が出土している。団子遺跡[3]の発掘調査からも前期の環濠や土器がみつかっている。また、友松遺跡の竪穴住居跡からは、後期の土器がまとまって出土した。寺家住宅団地造成工事に伴い横田１号遺跡[4]の発掘調査が実施され、後期から終末期にかけての集落がみつかり、竪穴住居跡から青銅製のもので再加工されたと思われる細型銅剣の破片やガラス製管玉・小玉が出土している。青谷１号遺跡[5]からは、後期から終末期の環濠と考えられる溝がみつかり、同時期の土器が大量に出土している。この時期の遺跡としては、このほかに諏訪神社周辺遺跡[6][7]、青谷２号遺跡、福原南遺跡、菰原１号遺跡などが知られている。



1. 友松２号遺跡　2. 友松3号遺跡　3. 友松遺跡　4. 友松4号遺跡　5. 貞松遺跡　6. 貞松2号遺跡　7. 有吉遺跡　8. 菰原1号遺跡
9. 団子遺跡　10. 田中遺跡　11. 湯谷迫2号遺跡　12. 横田2号遺跡　13. 横田1号遺跡　14. 福原南遺跡　15. 福原遺跡　16. 狐川1号遺跡
17. 青谷2号遺跡　18. 青谷1号遺跡　19. 諏訪神社周辺遺跡　20. 小西遺跡　21. 山崎2号遺跡　22. 山崎1号遺跡　23. 四日市遺跡
24. 御建遺跡　25. 安芸国分寺跡　26. 安芸国分寺周辺遺跡　27. 鐘鋳原池遺跡　28. 鐘鋳原上池遺跡　29. 五楽遺跡　30. 三ツ城古墳
31. 助平3号遺跡　32. 古市2号遺跡　33. 助平2号遺跡　34. 大槇2号遺跡　35. 大槇3号遺跡　36. 黄幡1号遺跡　37. 新木古墳群
38. 花が迫古墳群　39. 山陽道(江戸期)

第1図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

［古墳時代］

古墳時代になると、県内最大の三ッ城第1号古墳[8]をはじめとし多くの古墳が造営されたが、助平3号遺跡[9]や古市2号遺跡[9]など三ツ城古墳周辺の集落遺跡をのぞき同時代の集落はあまり発見されていない。近年の調査成果としては、横田１号遺跡では土坑内から古墳時代の土師器および須恵器が出土している。また寺家北線道路改良工事に伴い発掘調査された福原2号遺跡の発掘調査では、遺物は出土していないが古墳時代のものと考えられる多角形の竪穴住居跡が検出されている。その後、6世紀代になると大型の石室を持つ古墳が多く築造され、この周辺では花が迫古墳群（11基）や新立古墳群（4基）などの存在が古くから知られている。

［古代］

律令時代は、安芸国賀茂郡に属し『和名類聚抄』の中にも『賀茂』の記載がみられる。西条駅東側には史跡安芸国分寺跡[10]があり、東大寺式の伽藍配置が推定されている。古代山陽道に関しては国分寺の南側を通っていたと考えられている。またそこから西側の青谷１号遺跡から須恵器のほか、円面硯や布目瓦などがみつかっており、青谷２号遺跡からも試掘調査で古代の須恵器が出土している。また近年の調査では狐川1号遺跡から大型の円面硯の破片が出土しており、西条盆地北側の山裾を中心に古代の遺跡が多く分布する様相がみられる。

［中近世～近代］

中世の遺跡では、田中遺跡[11]から鎌倉時代後期頃と考えられる溝状遺構から瓦器、土師質土器のほか、この時期の祭祀に関連すると思われる木製品の人形が出土している。山崎１号遺跡[12]から堀跡や橋脚が見つかり、国産陶磁器や輸入陶磁器のほか土師質土器が出土している。このことから、堀に囲まれた戦国時代の建物跡が想定されている。都市計画道路西条駅北線道路改良事業に係わる発掘調査では御建遺跡[13]から、中世の道路と考えられる遺構がみつかっている。横田２号遺跡[14]からは、包含層より多量の土師質土器や古銭（北宋の至和通宝）などが出土した。集落は貞松遺跡[15]の発掘調査により確認されている。そのほか包蔵地として福原遺跡、湯谷迫遺跡などがある。

江戸時代には、現在のＪＲ山陽本線西条駅の南側は宿場町として繁栄していたことが知られている。駅南側の西条駅前土地区画整理事業により四日市遺跡[16]の発掘調査が実施され、戦国時代から近代までの遺構と遺物が多くみつかっている。西条駅北線（駅前広場）街路整備事業の発掘調査では御建遺跡[17]から、近世の宿場町に係わる馬屋跡や蒸米用の釜場跡などの検出がある。そのほか、貞松遺跡からは江戸時代の掘立柱建物跡が、山崎２号遺跡[18]からは戦国時代から近世にかけての集落跡が確認されている。

参考文献

(1) 藤野次史編『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』広島大学埋蔵文化財調査室　平成16(2004)年

(2) 鍛冶益生編『黄幡1号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成17(2005)年

(3) 中山学編『団子遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会　平成16(2004)年

(4) 松尾祥子編『横田1号遺跡発掘調査報告書』大成エンジニアリング株式会社　平成24(2012)年

(5) 石井隆博編『青谷1号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島教育文化振興事業団　平成14(2002)年

(6) 妹尾周三編『諏方神社周辺遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成7(1995)年

(7) 石井隆博編『市内遺跡緊急調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成12(2000)年

(8) 石井隆博編『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成16(2004)年

(9) 青山透編『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』東広島市教育委員会　平成4年(1992)年

(10) 藤岡孝司編『安芸国分寺東方遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成9(1997)年

中山学編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成11(1999)年

阿賀岡希子編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅱ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成12(2000)年

妹尾周三編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅲ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成13(2001)年

妹尾周三編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅳ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成14(2002)年

妹尾周三編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅴ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成15(2003)年

渡邊昭人編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅵ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成16(2004)年

渡邊昭人編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅶ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成17(2005)年

石垣敏之編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅷ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成18(2006)年

中山学編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅸ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成19(2007)年

植田広編『安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成21(2009)年

(11) 立川俊之編『田中遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成6(1994)年

(12) 妹尾周三編『山崎1号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成7(1995)年

(13) 吉野健志編『御建遺跡発掘調査報告書Ⅰ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成22(2010)年

(14) 植田広編『横田2号遺跡・福原2号遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会　平成25(2013)年

(15) 石垣敏之編『貞松遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会　平成21(2009)年

(16) 中山学編『四日市遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会　平成14(2002)年

石垣敏之編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成16(2004)年

石垣敏之編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成17(2005)年

井野上靖編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅲ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成18(2006)年

増田晴美・和田崇志編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅳ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成18(2006)年

(17) 植田広編『御建遺跡発掘調査報告書Ⅱ』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成25(2013)年

(18) 吉野健志編『山崎2号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団　平成11(1999)年

Ⅲ　調 査 の 概 要

1. 友松２号遺跡

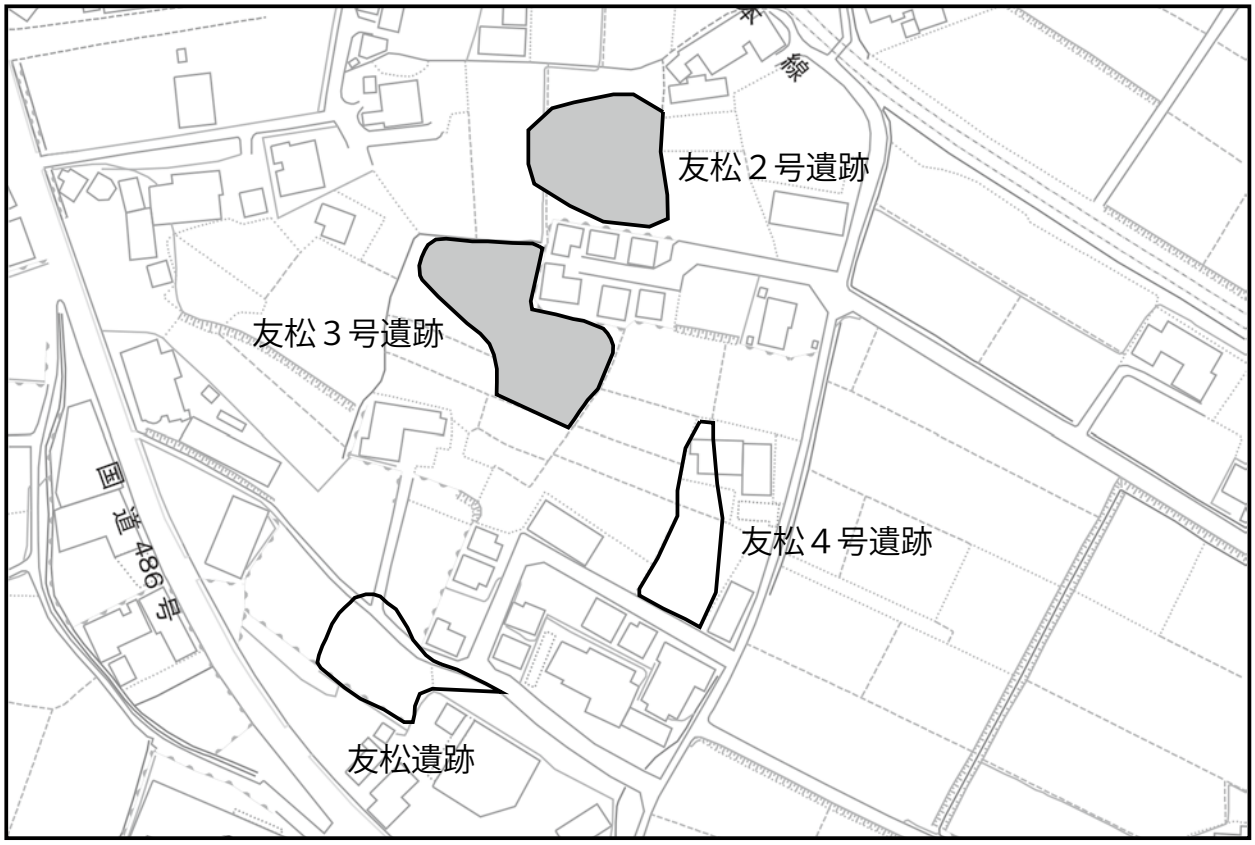
調査は、住宅団地の道路部分のみを対象としたため第3図に示したような断続的な調査区となった。1区から順に試掘調査により確認した遺構検出面まで重機による表土剥ぎを行い、その後、精査作業及び遺構検出、実測および写真撮影などを行った。調査終了後に重機を使用し調査区を埋め戻した。

調査の結果、溝状遺構4条、性格不明遺構1基、土坑10基などを検出した。遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器（白磁、青磁）、古銭（銅銭）および石製品（石鏃、砥石）などが出土した。

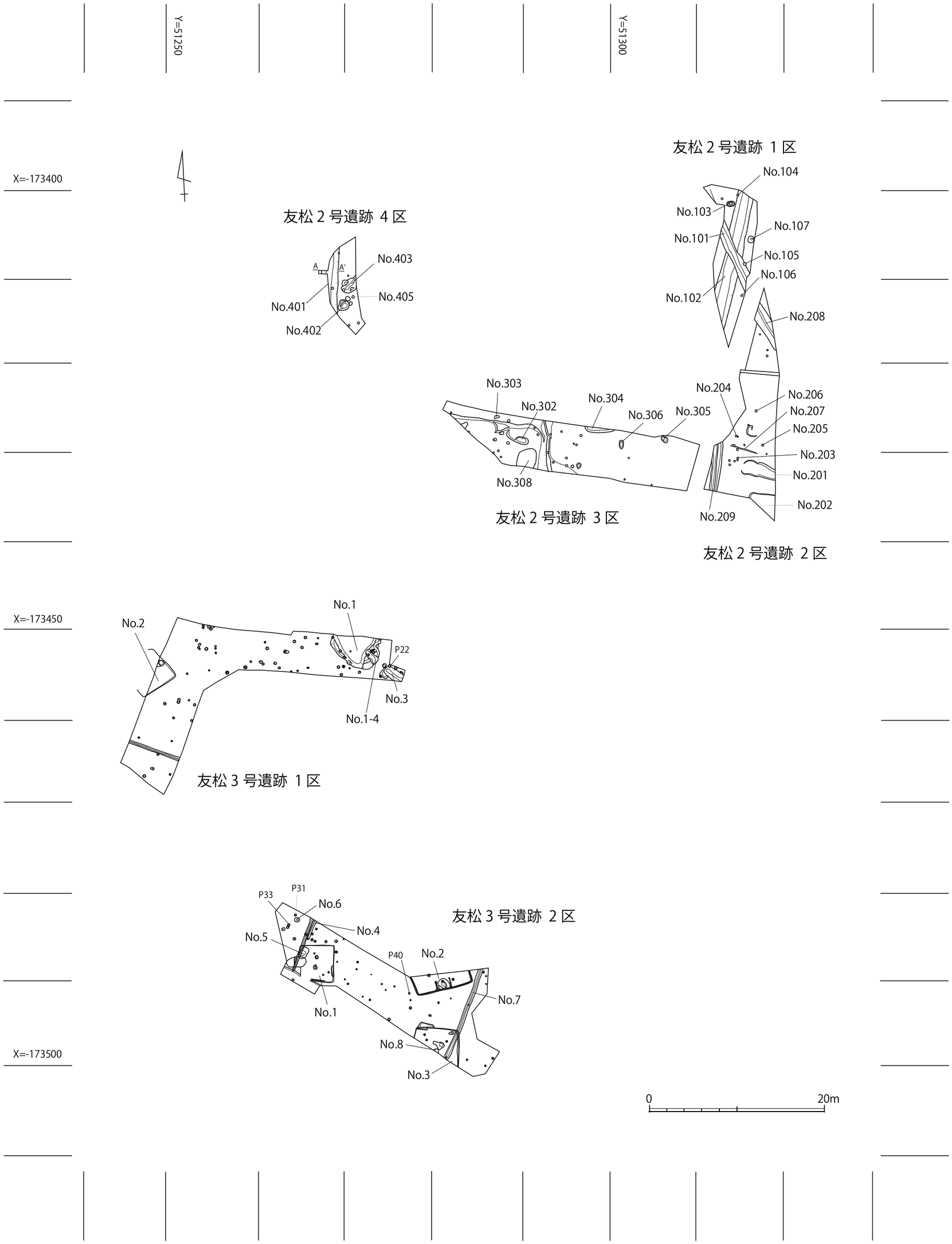
2. 友松３号遺跡

調査は、こちらも住宅団地内の道路部分のみを対象とし、北側の調査区を1区、南側の調査区を2区として実施した。調査は1区から順に、試掘調査により確認した遺構検出面まで重機を使用し表土剥ぎを行い、その後、精査及び遺構検出、実測および写真撮影などを行った。調査終了後に重機を使用し調査区を埋め戻した。

調査の結果、竪穴住居跡4軒、溝状遺構6条、土坑4基などを検出した。遺物は、弥生土器、土師器、土師質土器、国産陶磁器などが出土した。



第２図　友松２・３号遺跡の位置（1：2,500)



第 3 図　友松 2・3 号遺構配置図（1：400）

Ⅳ　遺構と遺物

1. 友松２号遺跡の遺構と遺物

本遺跡では、土坑10基、溝状遺構4条、性格不明遺構1基を検出した。1区で弥生時代と中世の溝状遺構を検出した。弥生時代の溝状遺構は2区へ続くが中世の溝状遺構は1区で検出したものと2区で検出したものは規模が異なる。3区は削平が著しいが中世初頭の遺物を多く包含する。4区は弥生時代の土坑2基と中世の溝状遺構１条を検出した。遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、輸入陶磁器（白磁、青磁）、石製品（石鏃、砥石）などが出土した。

以下、発掘調査で検出した遺構と、それに伴う遺物について詳述する。

No.101、No.208（SD）（第４・５図、図版２）

No.101は1区と2区北半を北北西に横断する溝状遺構である。東西ともに調査範囲外まで延びる。全長は不明だが調査区1区内では長さ約6.8ｍ、幅約1.2～1.4ｍ、深さ約1.1ｍ、2区内No.208では長さ約4.5ｍ、幅約1.5ｍ、深さ約1.2ｍとなる。埋土はNo.208を例にとると第1層から第8層の暗褐色系の堆積（厚さ約0.7m）と、第9層から第12層までの黄褐色系の堆積（厚さ約0.5ｍ）、第13層の溝底堆積土（厚さ約0.1ｍ）からなっており、第12層下層からは弥生土器の甕か壺の底部が出土している。

No.102（SD）（第４図、図版２）

No.102は1区の中央を南北にNo.101を切ってとおる中世の溝状遺構である。後世の削平を受けていることから残りは良くないが、北側は調査範囲外に延びる。南側については延長線上の2区に同じく溝状遺構No.209を検出しているが幅が狭く、浅いため同一の溝であるかは不明である。1区内では長さ約7.2ｍ、幅1.9～2.0ｍ、深さ約0.4ｍである。埋土は褐灰色土で底部では黒褐色土の堆積がみられる。遺物は備前焼の口縁部と青磁の椀底部、後期様式の瀬戸袴腰香炉が出土している。

No.103（SK）（第４図、図版２）

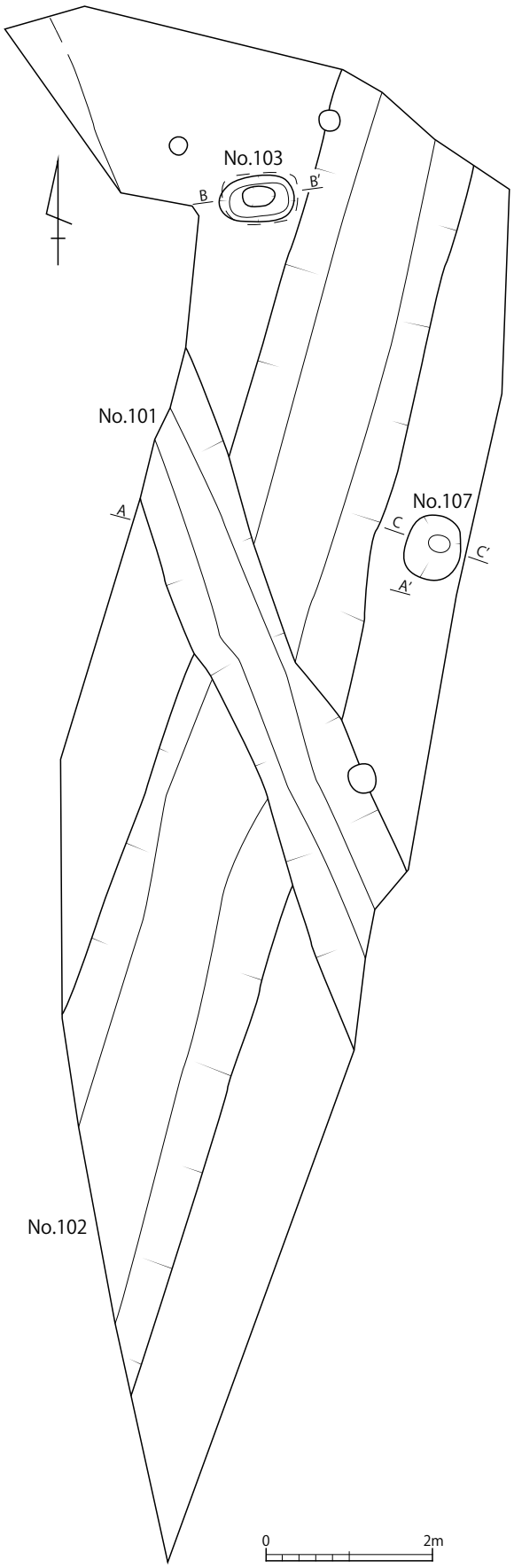
No.103は1区北端、SD2のすぐ西側に位置する中世の袋状に掘り込まれた土坑である。規模は現存で長軸0.9ｍ、短軸0.5ｍ、深さ約0.65ｍ、また袋状を呈し東西で上面幅0.65m、下面幅0.9mである。埋土は褐灰色砂質土の堆積と黒褐色土の溝底堆積がみられる。遺物は中世末期の鍋の破片などが出土した。

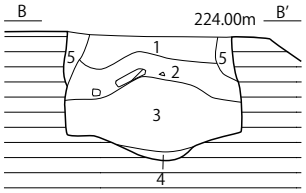
No.107（SK）（第４図）

No.107は1区東半、No.101とNo.102の交わる点の東側に位置する土坑である。規模は現存で直径0.8ｍ、深さ約0.24ｍである。埋土は褐灰色砂質土の堆積がみられる。遺物は薄手、器形不明の土器片１点のみで小さな小片であるため図示しなかった。遺構の詳細な時期、性格も不明である。

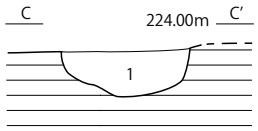
No.202（SK）（第５図）

No.202は2区南東端にあり、浅い窪み状の土坑である。後世の削平をかなり受けていることから残りは良くない。南東方向へ調査範囲外に延びているものと思われる。規模は残

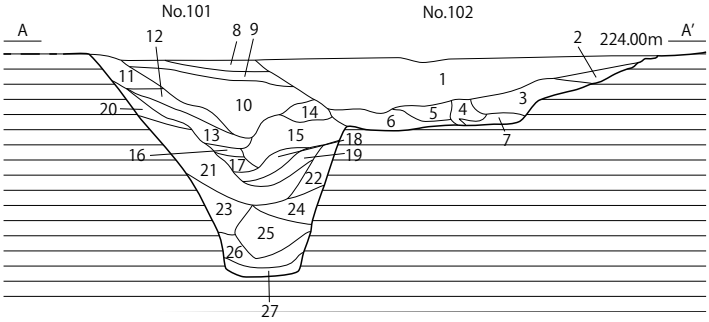




No.103土層説明
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
2　褐灰色砂質土(10YR5/1)
3　明黄褐色砂質土(10YR7/6)(灰色土混じる)
4　褐灰色砂質土(10YR5/1)(炭混じる)
5　黄褐色粘質土(2.5YR5/4)

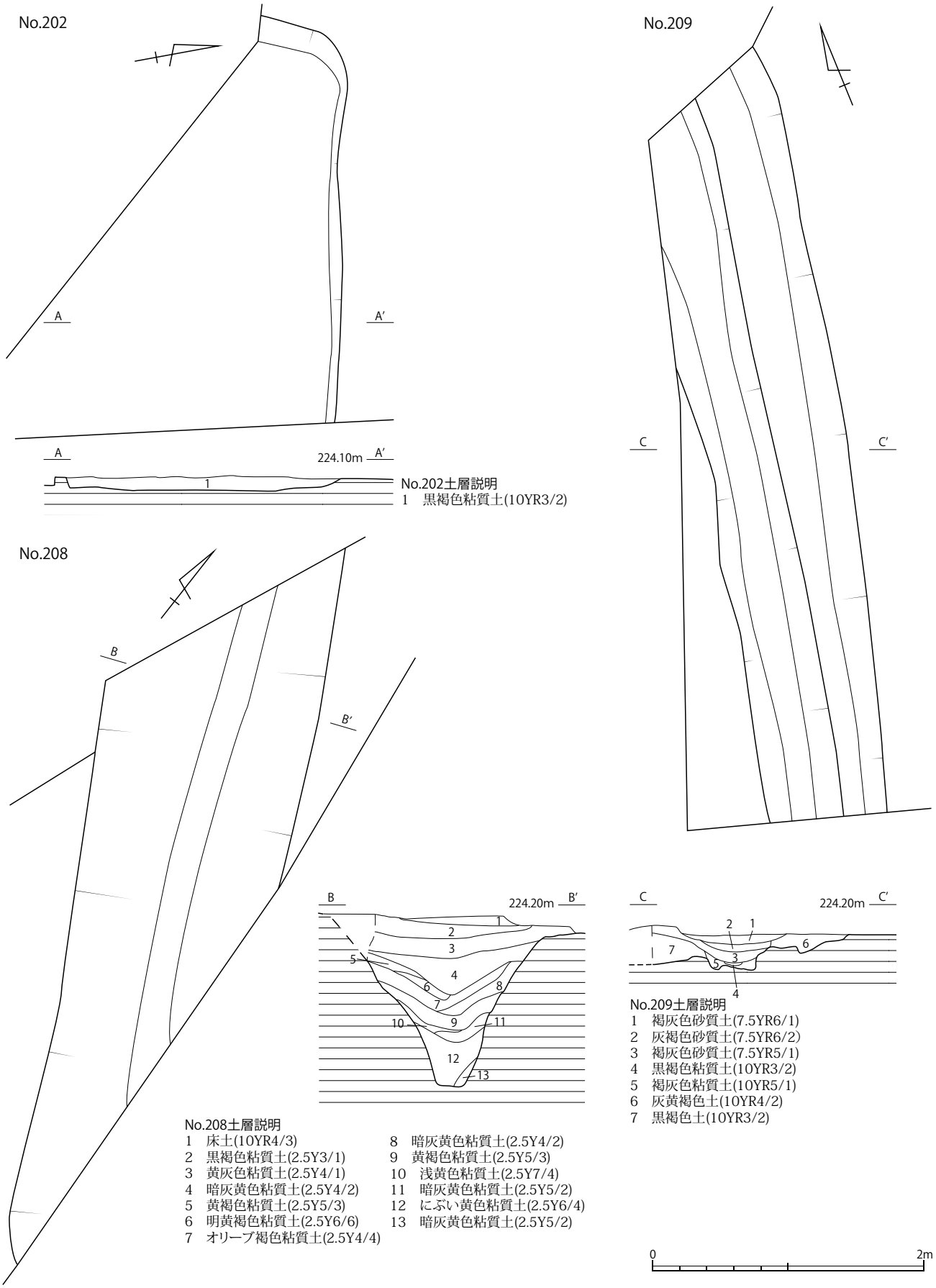


No.107土層説明
1　褐灰色砂質土(10YR5/1)

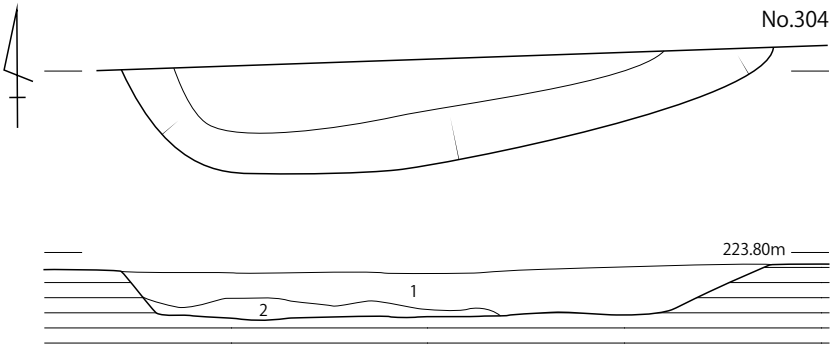


No.101・102土層説明
1　褐灰色土(10YR4/1)
2　浅黄色土(2.5Y7/4)に褐灰色土(10YR5/1)が混じる
3　褐灰色土(10YR5/1)
4　灰色砂質土(7.5Y5/1)(粗い)
5　褐灰色粘質土(10YR5/1)
6　褐灰色粘質土(10YR5/1)に黒褐色土(10YR3/1)と浅黄色土(2.5Y7/4)が混じる
7　褐灰色粘質土(10YR5/1)
8　黒褐色土(2.5Y3/1)
9　黄灰色土(2.5Y4/1)
10　褐灰色粘質土(10YR4/1)
11　灰黄褐色粘質土(10YR4/2)
12　黄褐色粘質土(2.5Y5/3)
13　暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)
14　灰色粘質土(5Y4/1)
15　暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)(灰色粘土混じる)
16　褐灰色粘質土(10YR4/1)に浅黄色粘質土(2.5Y7/4)が混じる
17　灰黄色粘質土(2.5Y6/2)
18　灰色粘質土(5Y4/1)
19　灰黄色粘質土(2.5Y6/2)
20　灰黄色粘質土(2.5Y6/2)
21　浅黄色土(2.5Y7/4)
22　暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)
23　にぶい黄色土(2.5Y6/3)
24　黄褐色土(2.5Y5/3)
25　暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)
26　明黄褐色粘質土(2.5Y7/6)
27　暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)

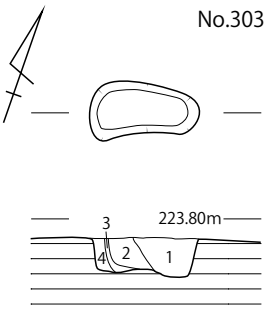
第4図　友松2号遺跡　1区No.101・102・103・107実測図（平面-1：80、断面-1：40）



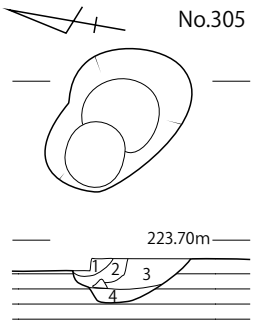
第5図　友松2号遺跡　2区No.202・208・209実測図（1：40）



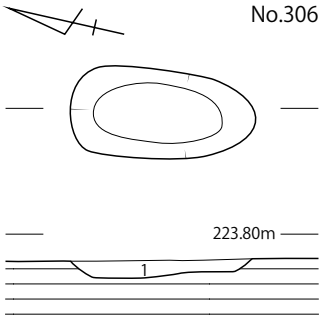
No.304土層説明
1　黄灰色粘質土(2.5Y4/1)
2　黄灰色土(2.5Y5/1)(やや粘性あり)



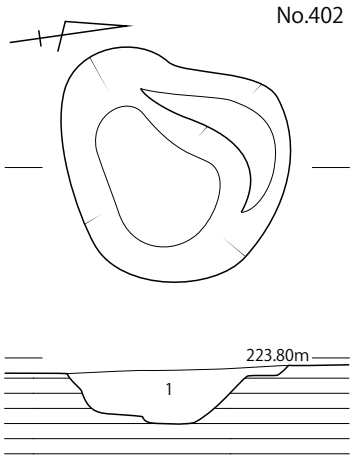
No.303土層説明
1　黒褐色粘質土(7.5YR3/1)
2　灰黄褐色粘質土(10YR5/2)
3　黒色粘土(7.5YR2/1)
4　灰黄褐色粘質土(10YR5/2)



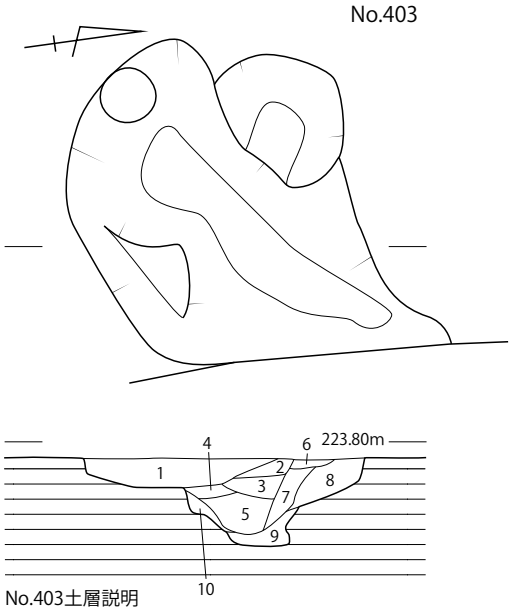
No.305土層説明
1　褐灰色粘質土(10YR4/1)
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
　(褐灰色土混じる)
3　褐灰色粘質土(10YR4/1)
4　にぶい黄橙色土(10YR6/4)
　(褐灰色土若干含む)



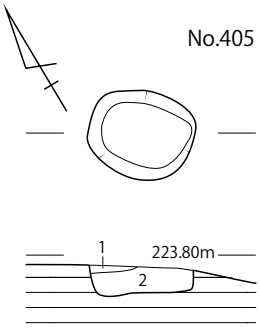
No.306土層説明
1　明黄褐色土(10YR6/6)に褐灰色土(10YR5/1)が混じる



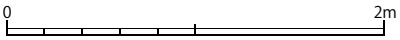
No.402土層説明
1　黒褐色粘質土(10YR3/2)
　(炭・赤色粒子含む)



No.403土層説明
1　黒褐色土(10YR3/2)(黄色ブロック含む)
2　黒褐色土(10YR3/2)(黄色ブロック含む)
3　にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)
4　黒褐色粘質土(10YR3/2)
5　黒褐色粘質土(10YR4/1)
6　にぶい黄橙色粘質土(10YR6/4)
7　灰黄褐色粘質土(10YR5/2)
8　黄褐色粘質土(2.5YR5/3)
9　灰黄褐色土(10YR6/2)
10　にぶい黄橙色粘質土(10YR6/3)



No.405土層説明
1　黄褐色粘質土(2.5YR5/3)
2　黒褐色粘質土(10YR3/2)



第6図　友松2号遺跡　3区No.303～306・4区No.402・403・405・406実測図(1:40)

存で長さ約2.8ｍ、幅2.1ｍ、深さ約0.1ｍである。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は土師質土器の皿底部が複数出土しており、うちひとつは完形品であった。

No.209（SD）（第5図）

No.209は2区南端にあり、No.102と方向を同軸とする中世の溝状遺構である。後世の削平をかなり受けていることから残りは良くない。南北方向ともに調査範囲外に延びているものと思われる。規模は現存で長さ約1.1ｍ、幅1.1ｍ、深さ約0.3ｍである。埋土は褐灰色砂質土の堆積と黒褐色土の溝底堆積がみられる。溝底がやや不整形となっているがこれは溝を複数回改修しながら継続的に使用してきたことによるものと考えられる。遺物は土師質土器の坏の破片や亀山焼の破片などが出土したがいずれも小片のみであったため図示しなかった。

No.301（SX）（第3図）

No.301は3区西半に位置する、浅く不整形な窪みの中に複数の土坑や柱穴状ピットを含む性格不明の遺構である。後世の削平をかなり受けていることから残りは良くない。規模は残存で長さ約12ｍ、幅5.6ｍ、深さ約0.05ｍで東側に土手状の境界をともなう。埋土は褐灰色砂質土の堆積と黒褐色土の溝底堆積がみられる。遺物は中世を中心に出土したが、いずれも小片のみであったため図示しなかった。

No.303（SK）（第6図）

No.303は3区西半北側。規模は現存で長軸0.9ｍ、短軸0.5ｍ、深さ約0.1ｍ、不整形な楕円形で上面はかなり削平されているものと考えられる。埋土は明黄褐色土に褐灰色土が混じる堆積がみられるが、遺物は小片ばかりのため図示しなかった。遺構の時期・性格とも不明である。

No.304（SK）（第6図）

No.304は3区中央西寄りの北端に位置する土坑である。遺構の北半は調査区外のため全体の規模は不明だが、調査区内で長軸3.9ｍ、短軸0.6ｍ、深さ約0.5ｍと比較的大きな土坑である。埋土はオリーブ褐色土、黄灰色粘質土、黄灰色土で、遺構上面の埋土からは遺物が多く出土したが、遺構内では小片ばかりのため図示しなかった。遺構の時期・性格とも不明である。

No.305（SK）（第6図）

No.305は3区西側北端に位置する土坑である。長軸0.9ｍ、短軸0.6ｍ、深さ約0.23ｍと小規模で土坑内に段差があり埋土は褐灰色粘質土とにぶい黄褐色土からなる。こちらの土坑についても出土遺物は小片ばかりのため図示しなかった。遺構の詳細な時期・性格ともに不明である。

No.306（SK）（第6図）

No.306は3区中央北側。規模は現存で長軸0.6ｍ、短軸0.3ｍ、深さ約0.2ｍ、土坑の底はドーナツ状に凹む。埋土は黒褐色粘質土と灰黄褐色粘質土の堆積がみられる。遺物は小片ばかりのため図示しなかった。遺構の詳細な時期・性格とも不明である。

N0.401（SD）（第7図）

No.401は4区の西端にある溝状遺構である。後世の削平を受けていることから残りはあまり良くない。南北ともに調査範囲外に延びているものと思われる。規模は長さ不明、幅約1.9ｍ、深さ約0.16ｍである。埋土は灰黄褐色粘質土の堆積がみられる。遺物は青磁の破片や土師質土器の破片が出土しているがいずれも小片のみであったため図示しなかった。

No.402（SK）（第6図）

No.402は4区南半に位置し、4区内では比較的大型の弥生時代の土坑である。やや不整形だが規模は直径約1.2ｍ、深さ約0.3ｍである。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は中期後半の弥生土器壺口縁部などが出土している。調査区が狭いこともあり周囲から同時代の遺構は検出されておらず、詳細な性格は不明である。

No.403（SK）（第6図）

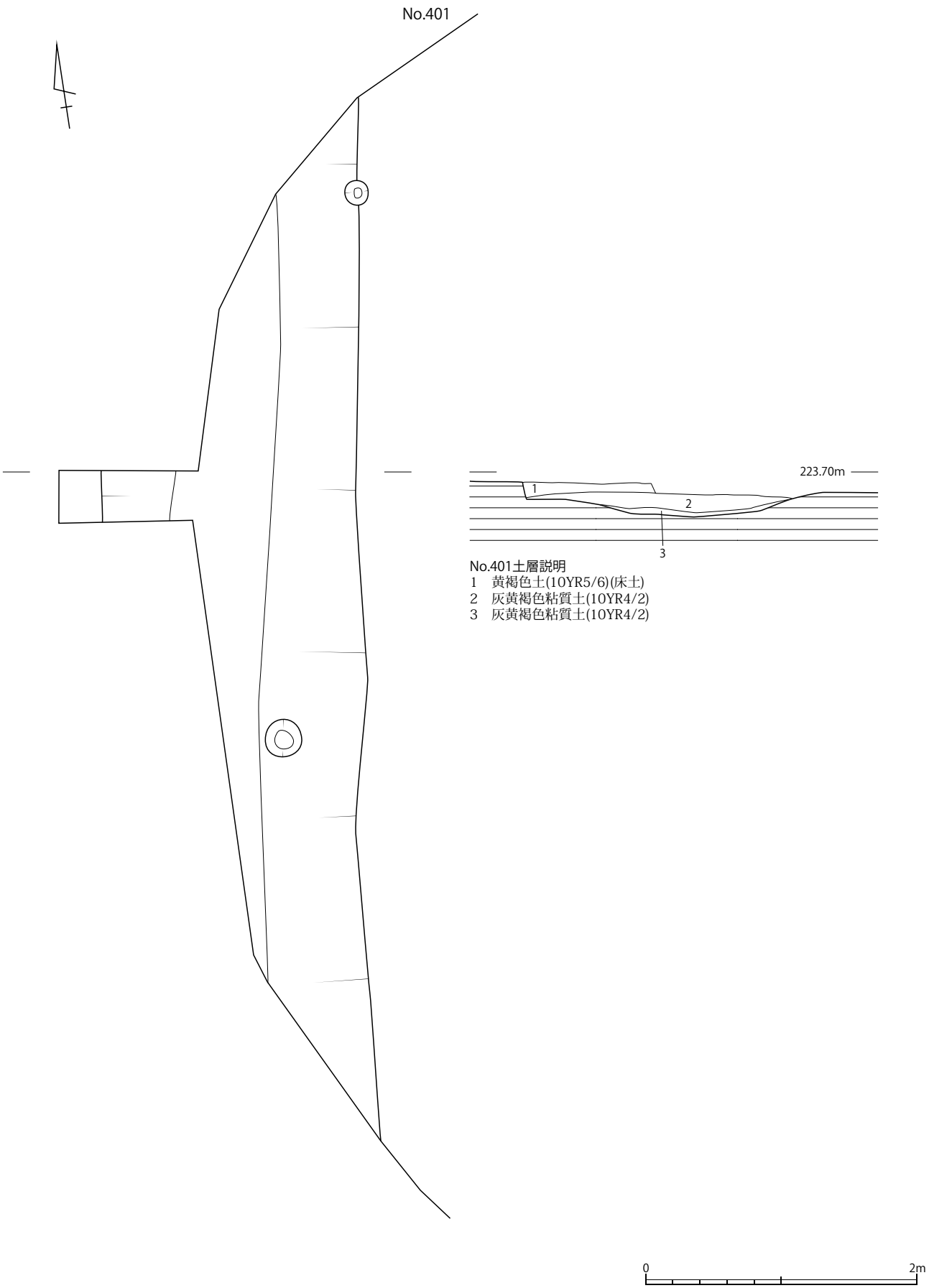
No.403は4区中央に位置する土坑で、不整形な広がりは風倒木の攪乱によるものと推測される。規模は4区内で長さ約1.8ｍ、幅約1.4ｍ、深さ約0.4ｍである。遺物は須恵器坏蓋の破片（8、9）のほか土師器の小片などが出土している。土師器の破片についてはいずれも小片のため図示しなかった。

No.405（SK）（第6図）

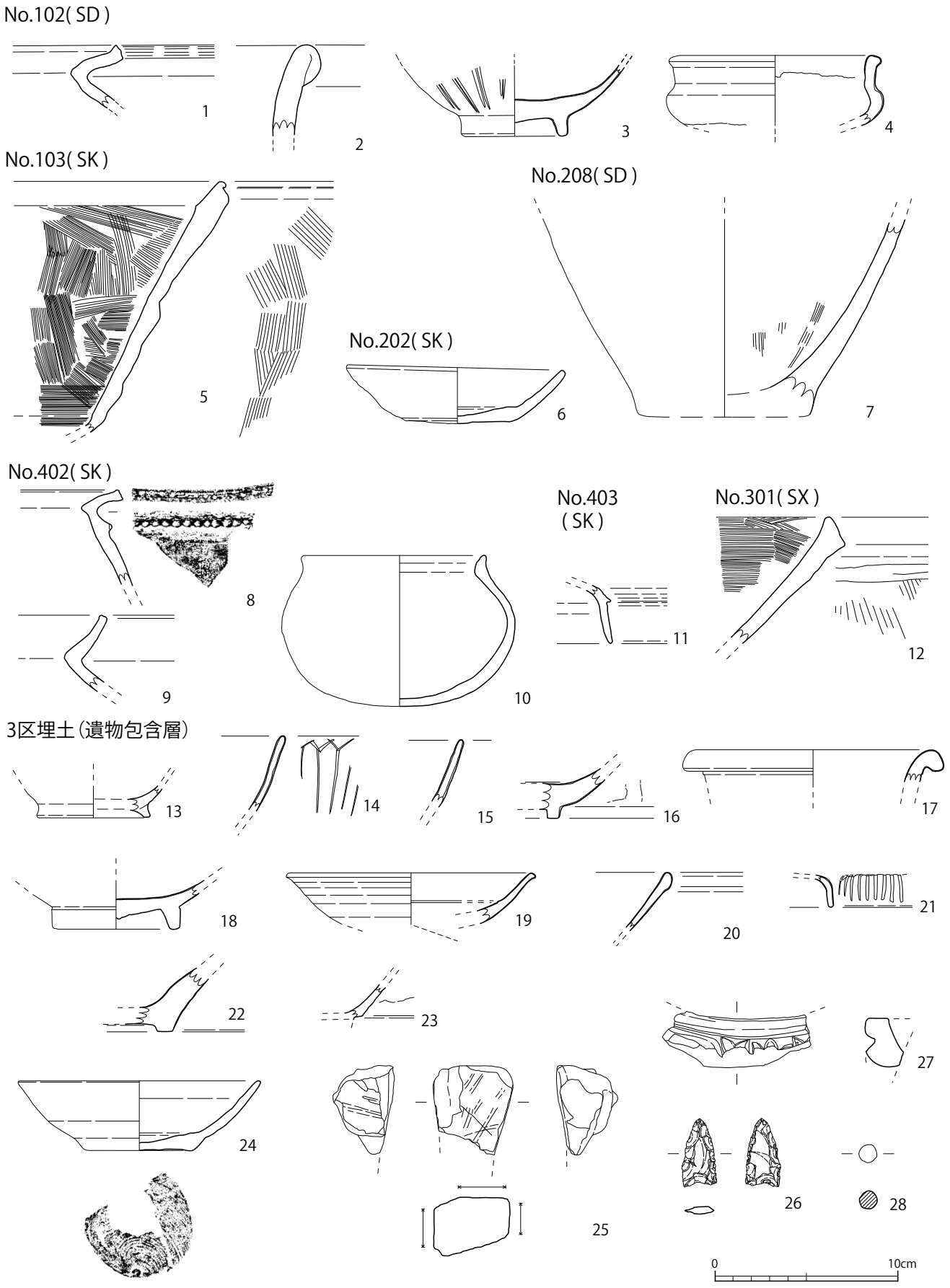
No.405はNo.402とNo.403の間にある土坑で規模は直径約0.5ｍ、深さ約0.15ｍである。埋土は上面に一部、黄褐色粘質土が堆積することを除いて黒褐色粘質土である。遺物は小片ばかりのため図示しなかった。遺構の詳細な時期・性格とも不明である。

遺構に伴わない遺物（第8図、図版6）

遺構に伴わない遺物について、図示したほとんどのものは中世の遺物包含層となっていた3区埋土から出土している。まず13は須恵器の椀で断面逆三角形の貼付高台をもち12世紀頃とのもの考えられる。14は青磁の椀口縁部で蓮華文をもつ。15は青磁の埦口縁部で外面欠損のため詳細は不明だが鎬蓮弁文をもつ可能性がある。16は青磁の埦底部で外面に蓮弁文、内面に圏線をもち全面に施釉されている。17、22は白磁の壺の口縁部および底部で厚み、焼成、施釉の質感において共通することから同一個体の可能性が高い。18は椀底部の破片で削り出し高台をもつ。20は椀の口縁部で丸みを帯びやや厚くなる。19の白磁皿には漆による継跡があり口縁はやや外反する。21は、青白磁の合子の蓋である。23は4区埋土から出土した天目茶碗の破片である。24は調査区外の1区No.102南側延長線上付近を試掘した際に出土した土師質土器の坏である。石製品は3区埋土から25の先端を欠損した砥石、4区から26の安山岩製打製石鏃が出土している。また3区埋土からは28の大きさ1cm程度の土玉も出土している。



第7図　友松2号遺跡　4区No.401実測図(1：40)



第8図　友松2号遺跡　出土遺物実測図（1：3）

第１表　友松２号遺跡出土遺物観察表　　（　）は復元値

番号	出土地点	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
1	No102	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外：ナデ、凹線（２条） 内：ナデ	密	不良	外：浅黄橙 内：灰白 断面：灰	
2	No102	備前焼	壺	口縁	—	—	—	ナデ	密	不良	外：にぶい橙 内：褐灰 断面：にぶい黄橙	口縁部折り返し
3	No102	青磁	椀	底	—	—	5.8	外：施釉、蓮弁文 内：施釉	密	良	外：明緑灰 内：明オリーブ灰 断面：灰白	
4	No102 ＋３区埋土	陶器	香炉	口縁	(11.6)	—	—	ロクロナデ、施釉	密	良	外：黒（釉） 内：灰白 断面：灰白	
5	１区 No.103	土師質土器	鍋	口縁	—	—	—	外：櫛目 内：櫛目	密	良	外：灰褐色 内：灰褐色 断面：褐灰	外面：スス付着
6	No202	土師質土器	皿	—	11.9	3.2	5.8	回転ナデ	密	良	浅黄橙	底部回転糸切り
7	No208	弥生土器	壺か甕	底	—	—	(9.4)	外：ナデ 内：ナデ、板状工具によるナデか	粗	良	橙	
8	No402	弥生土器	甕か	口縁	—	—	—	外：ナデ、口縁刻目、肩部に刻目貼付突帯 内：ナデ	密	不良	外：褐灰 内：灰白 断面：灰	
9	No402	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	ナデ	密	良	浅黄橙	
10	No402	弥生土器	鉢	—	10.0	8.2	—	ナデ			橙	外面：スス付着
11	No403	須恵器	杯蓋	口縁	—	—	—	外：ヘラケズリ 内：ロクロナデ	密	良	灰	
12	No301	土師質土器	鍋	口縁	—	—	—	外：櫛目 内：ハケメ	密	不良	外：灰白 内：灰白 断面：褐灰	
13	３区埋土	須恵器	椀	底	—	—	(6.1)	ロクロナデ	密	良	灰	貼付高台
14	３区検出面	青磁	椀	口縁	—	—	—	蓮弁文、施釉	密	良	外：灰黄褐（釉） 内：灰黄褐（釉） 断面：灰白（露胎）	
15	３区埋土	青磁	椀	口縁	—	—	—	施釉	密	良	外：灰緑 内：灰緑 断面：灰白	鎬蓮弁文の可能性あり
16	３区埋土	青磁	椀	底	—	—	—	外：施釉、蓮弁文か 内：施釉、圏線	密	良	外：灰黄緑（釉） 内：灰黄緑（釉） 断面：灰白（露胎）	削り出し高台
17	３区検出面	白磁	壺	口縁	(14.2)	—	—	施釉	密	良	外：淡黄 内：灰白 断面：灰白	
18	３区埋土	白磁	椀	底	—	—	(7.0)	施釉	密	良	外：灰白（釉） 内：淡黄（釉） 断面：灰白（露胎）	削り出し高台
19	３区埋土	白磁	皿	口縁	(13.6)	—	—	外：施釉 内：施釉、圏線	密	良	外：灰白（釉） 内：灰白（釉） 断面：白（露胎）	漆による継跡あり
20	３区埋土	白磁	椀	口縁	—	—	—	ケズリ、施釉	密	良	外：淡黄 内：淡黄 断面：灰白	
21	３区埋土	青白磁	合子蓋	口縁	—	—	—	外：施釉 内面：ロクロナデ、施釉	密	良	外：灰白（釉） 内：灰白（釉） 断面：灰白（露胎）	
22	３区埋土	白磁	壺か	底	—	—	—	施釉	密	良	外：淡黄（釉） 内：灰白（釉） 断面：灰白（露胎）	蛇の目高台
23	４区埋土	陶器	天目茶碗	底	—	—	—	外：ケズリ、施釉 内：施釉	密	良	外：灰黄褐（釉） 内：灰黄褐（釉） 断面：灰白（露胎）	
24	試掘５Ｔ	土師質土器	杯	—	(13.2)	3.8	5.8	ロクロナデ	密	不良	外：にぶい黄橙 内：暗灰黄 断面：暗灰黄	回転糸切り
25	３区検出面	石製品	砥石	—	縦 4.9	横 4.3	厚 3.0	—	—	—	—	67.84g
26	４区検出面	石製品	打製石鏃	—	縦 1.8	横 3.7	厚 0.4	—	—	—	—	3.01g、安山岩
27	３区埋土	瓦	軒平	—	—	—	—	—	密	良	外：灰 内：灰白 断面：灰白	
28	３区埋土	土製品	土玉	—	1.0	1.0	—	—	密	良	灰	0.83 g

2. 友松３号遺跡の遺構と遺物

本遺跡では、竪穴住居跡４軒、溝状遺構６条、土坑を４基検出した。遺物は１区の溝状遺構から前期の弥生土器、竪穴住居から土師器、土坑から中世の土師質土器などが出土した。以下、発掘調査で検出した遺構と、それに伴う遺物について詳述する。

友松３号遺跡１区

No.1（SD）（第９図、図版４）

No.1は１区の北東端に位置する幅広の溝状遺構もしくは土坑で、調査区外北側へ遺構が延びる。規模は検出部分で長さ約5.7ｍ、幅約４ｍ、深さ約0.45ｍである。埋土は褐色土、暗褐色土、黒褐色土の堆積がみられる。遺物は弥生前期の甕などが溝底から出土、安山岩製の打製石刃も出土している。この幅広の溝は中世の土坑No1–4（長さ約1.8ｍ、幅約0.7ｍ、深さ約0.3ｍ）により南東端を一部削平されており、そちらの埋土からほぼ完形の土師質土器の杯が複数点出土している。

No.2（SB），No.4（SK）（第10図、図版４）

No.2は１区の西端に位置する竪穴住居跡である。遺構西半は調査区外だが、平面形はほぼ正方形、壁溝は１条で全周すると推測される。規模は１辺4.4ｍ前後、深さ約0.3ｍだが主柱穴は不明である。住居北東側の壁際、中央付近に土坑No.4があり、規模は南北方向の長軸約0.9ｍ、東西方向の短軸約0.6ｍ、深さ約0.25ｍで、埋土は黒褐色土である。遺物は古墳時代前期の土師器甕およびミニチュア土器が出土しているほか、砥石が出土している。

No.3（SD）（第９図、図版４）

No.3は１区の北東端、No.1の東に位置する溝状遺構である。東側へは遺構が調査範囲外に延びているものと考えられる。規模は調査区内で長軸約2.3ｍ、短軸約1.2ｍ、深さ約0.29ｍで、埋土は暗褐色土である。遺物は弥生時代前期の甕、壺の破片のほか、磨製石斧が出土している。

No.1–4（SK）（第９図、図版４）

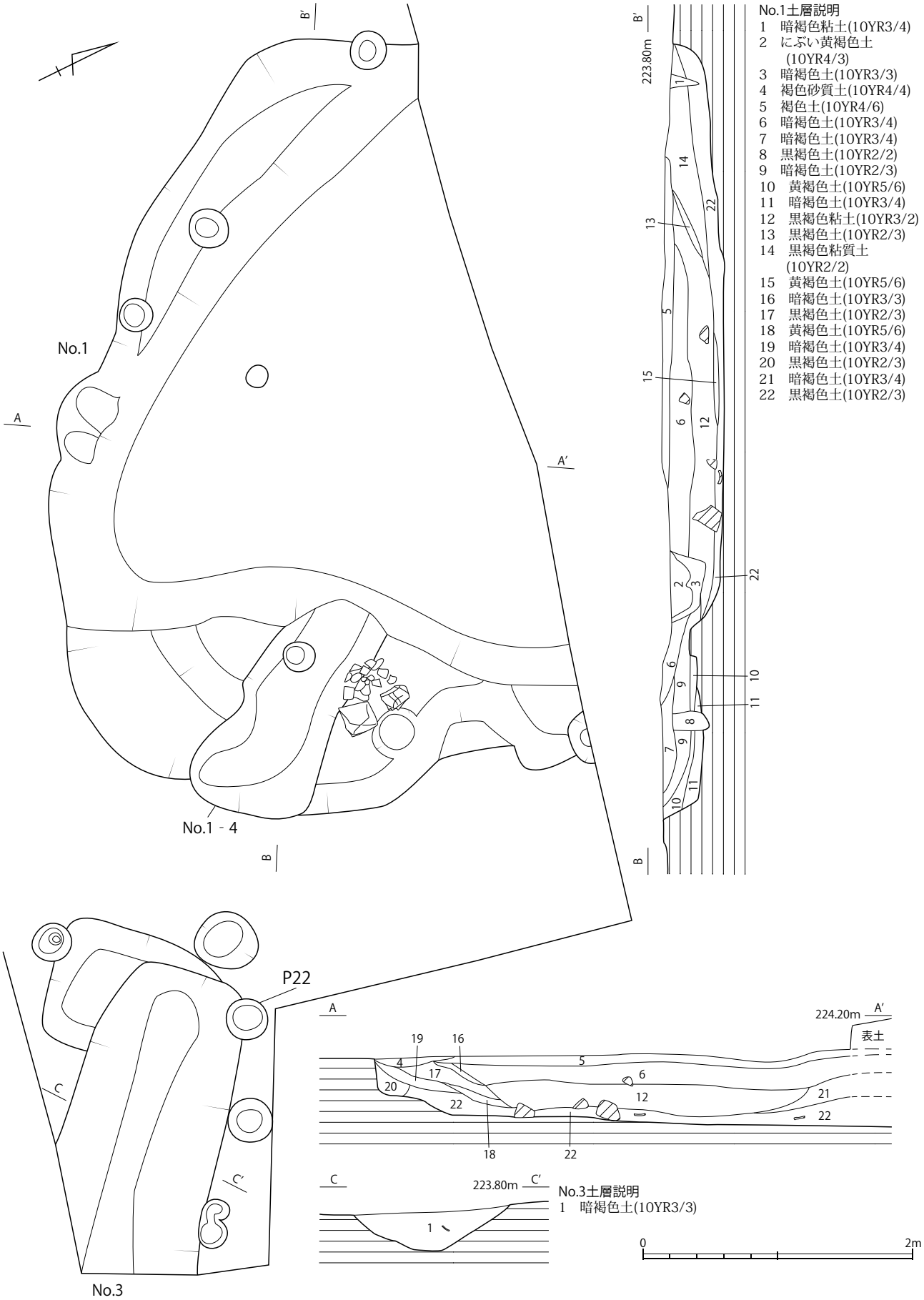
No.1–4は１区No.1の南東側を一部掘り込む中世の土坑である。平面形は隅丸長方形で、規模は東西方向の長軸約２ｍ、短軸約0.35～0.45ｍ、深さ約0.35ｍである。埋土は北西半でにぶい黄褐色土と暗褐色土、南東半では暗褐色土と黒褐色土である。遺物はほぼ完形の土師質土器の皿、杯などを出土したほか、N0.1にかかる北西部分では前期弥生土器の壺などを出土した。これは後世に掘り込んだ中世の土坑がNo.1の遺物包含層を攪乱したものと考えられる。

No.5（SD）（第11図）

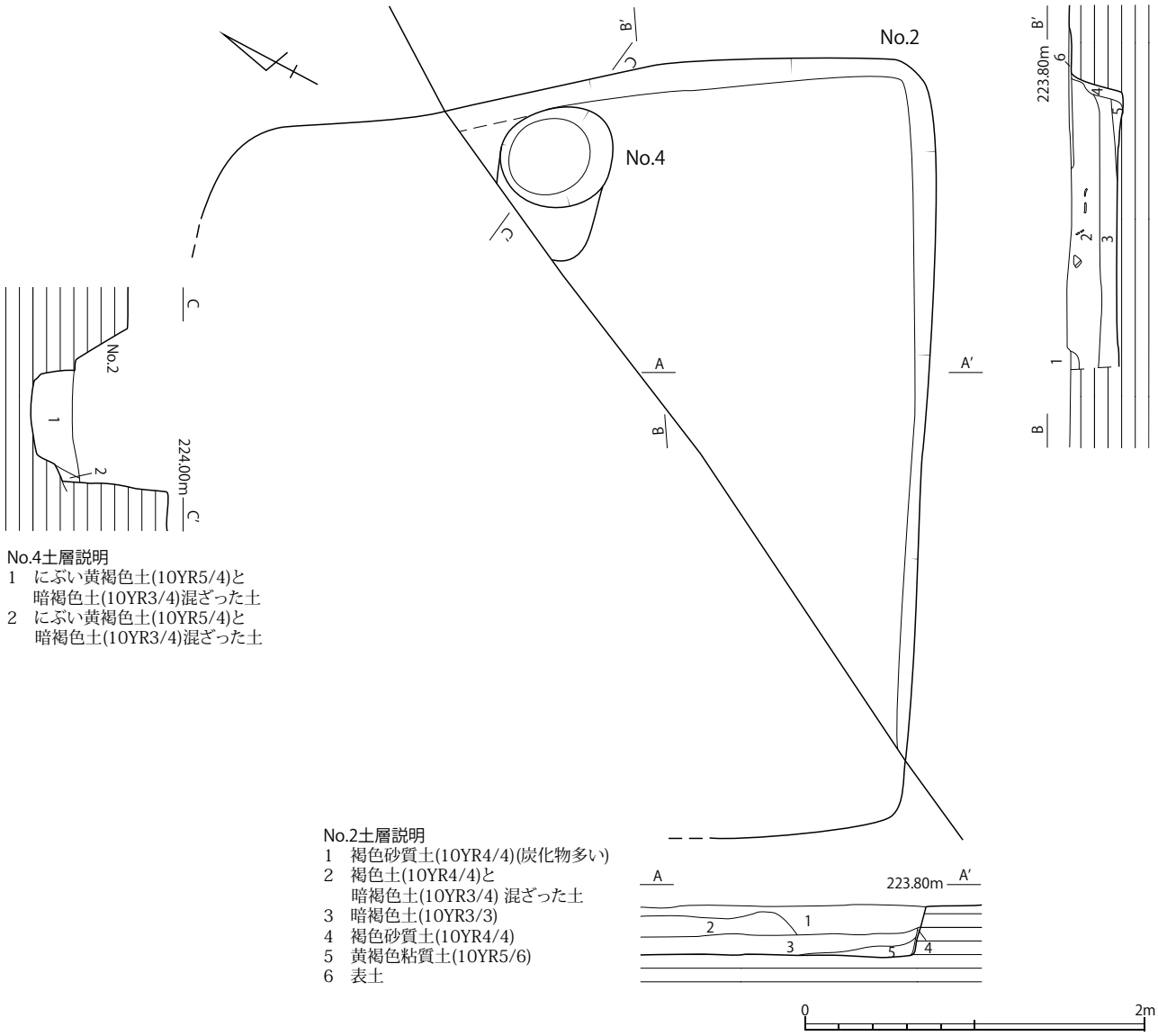
No.5は１区の南西に位置する東西方向の溝で、埋土はにぶい黄褐色砂質土、遺物は出土していないが現在の水田の地割と方位を同じくする点や掘り込みの浅さから近現代の溝跡と考えられる。

柱穴状ピットＰ22（第９図）

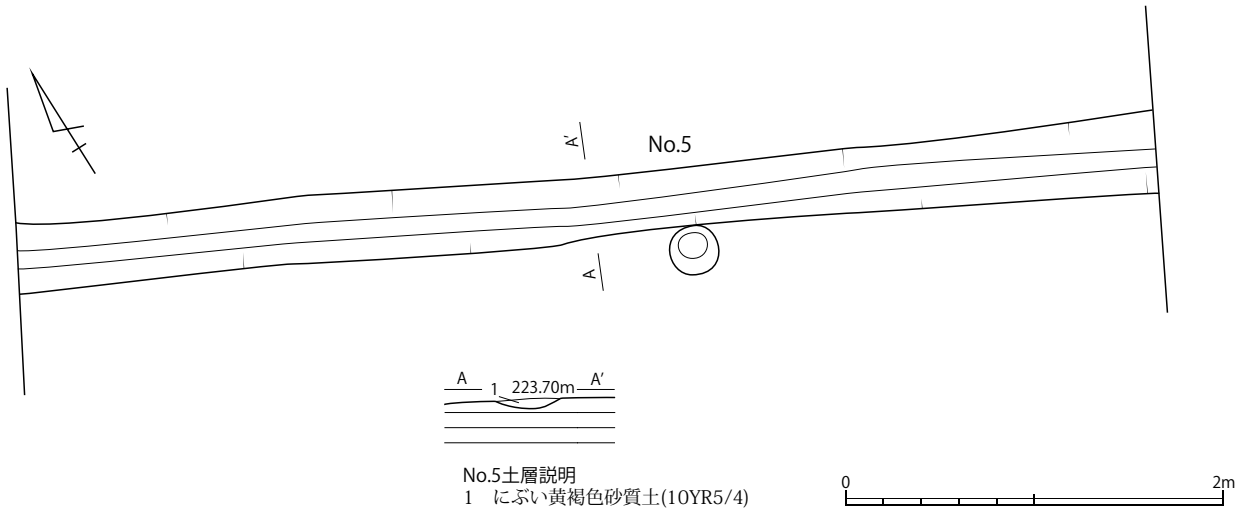
１区からは多くの柱穴状ピットが検出したが建物の平面プランを復原できるものはなかった。１区No.3北側に隣接して掘られたP22で土師質土器の皿底部が出土しているよう



第9図　友松3号遺跡　1区No.1・3実測図(1:40)



第10図　友松3号遺跡　1区No.2・4実測図(1:40)



第11図　友松3号遺跡　1区No.5実測図(1:40)

に1区内の柱穴状ピットはいずれも中世以降の遺物小片を含むもので弥生時代の溝状遺構にともなうものではないと考えられる。

友松３号遺跡２区

No.1（SB）（第12図、図版5）

No.1は2区の西端に位置する竪穴住居跡である。遺構の西半は中世の溝状遺構 No.6などで後世の削平を受け全容は不明だが、平面形は方形、壁溝は1条のみ南側に一部残存する状況が確認された。規模は東西方向の長辺約4.2ｍ、南北方向の短辺約3.8ｍ、深さ約0.2ｍである。住居中央の南北に2箇所の柱穴状ピットがあり、規模は北側で直径0.3ｍ、深さ約0.2ｍ、南側で直径0.3ｍ、深さ約0.25ｍで、深さ0.05ｍで段差がある。柱間距離は芯心で1.2ｍである。埋土は北側柱穴が黒褐色土、南側柱穴で暗褐色土がみられる。また遺構の西半から住居と同時期と考えられる土坑 No.5と住居より古い時代の風倒木の痕跡が検出された。遺物は遺構面までが浅く、攪乱されていたこともあり弥生土器、土師器、須恵器など様々な時代の土器小片が混在する。このため確実に遺構にともなう遺物は不明で詳細な遺構の存続時期は不明である。

No.2（SB）（第13図、図版5）

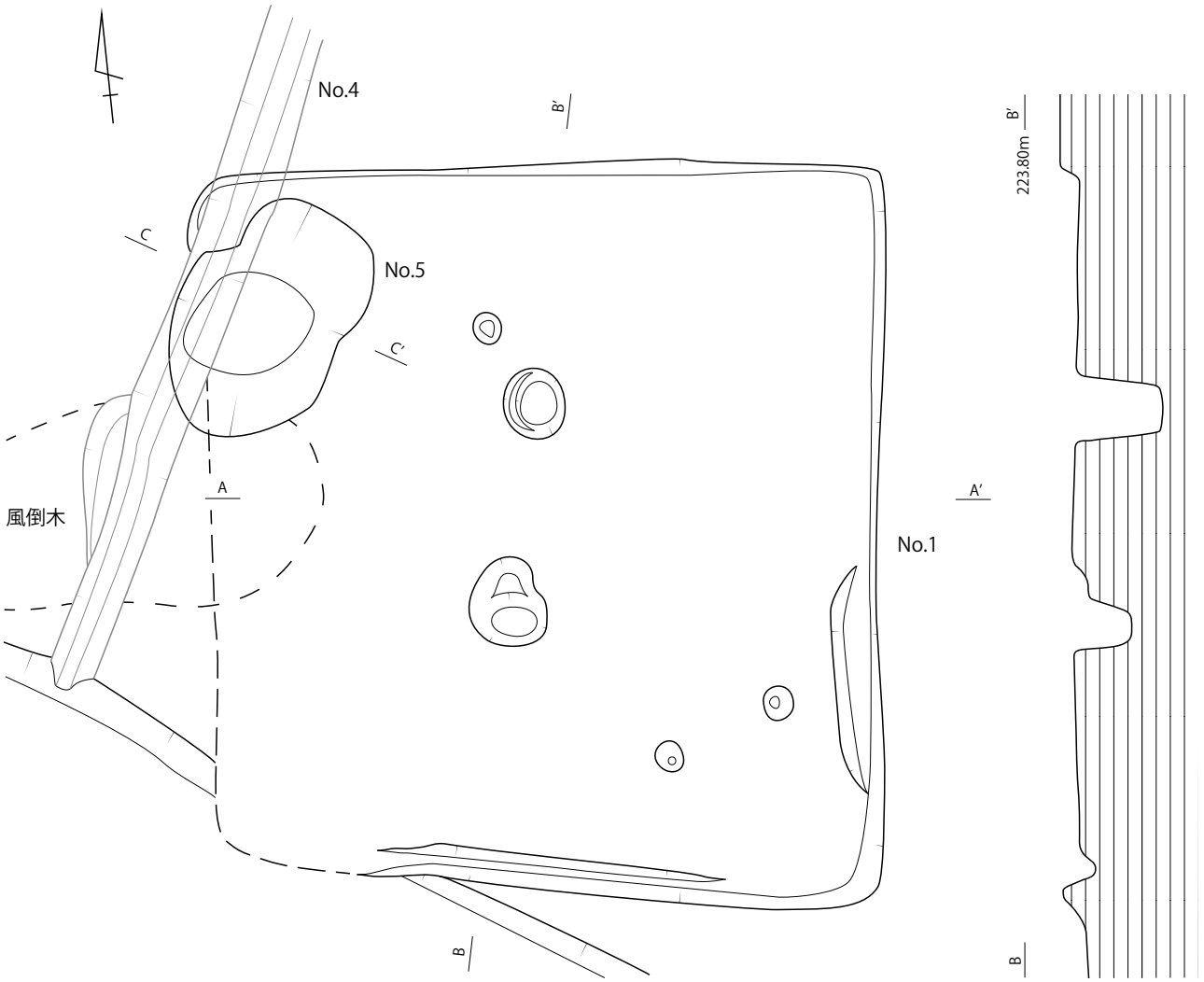
No.2は2区の北東に位置する竪穴住居跡である。遺構の北西半は調査区外のため、遺構全面は検出していない。全容は不明だが、平面形は方形、壁溝は1条で全周を巡っていた可能性が高い。規模は調査区内で東西方向の辺が約6.3ｍ、南北方向の検出幅約3.8ｍ、深さ約0.2ｍである。調査区内から2箇所の柱穴状ピットを検出したが、遺構全体を検出していないため主柱穴であるかは不明である。また住居跡南西端には壁溝に接する位置に土坑があり、その両側に長さ約1ｍ、幅10ｃｍ前後の2条の溝がこちらも壁溝と接するように掘られている。埋土は褐色土で、遺構にともなって出土した遺物は古墳時代前期の高坏、壺、ミニチュア土器のほか弥生時代終末期の壺など、数多く出土している。また調査区を北西に一部拡張した際に弥生時代前期の壺が出土しているが、こちらは1区で見つかったSD2などの遺構からの流れ込みの可能性が高い。

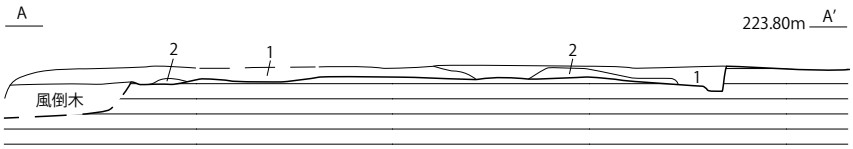
No.3（SB）（第14図、図版5）

No.3は2区の南東に位置する竪穴住居跡である。遺構南半は調査区外のため全容は不明だが、平面形は方形、壁溝は1条で東側に巡る。規模は東西方向の検出幅約5ｍ、南北方向の検出幅約4.5ｍ、深さ約0.15ｍである。調査区内から4箇所の柱穴状ピットを検出したが主柱穴かは不明である。また土坑が住居中央付近に2基、北東に１基、北西に2基確認されている。埋土は暗褐色土、にぶい黄褐色土で弥生時代終末期の椀底および鉢の口縁部、古墳時代の壺の胴部破片なども出土している。また遺構中央南側の土坑 No.8からは底部糸切り痕をもつ土師質土器の皿がほぼ完形で出土している。

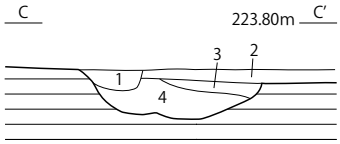
No.4（SD）（第3図）

No.4は2区 No.1（SB）の西半および No.5を掘り込む南北方向の溝状遺構で、南北ともに調査区外に延伸する。検出長約6.2ｍ、幅約0.3～0.4ｍ、深さ約0.2ｍで埋土は暗褐色土および黒褐色粘土である。遺物は土師器に少量の土師質土器が混じるがいずれも小片ばか





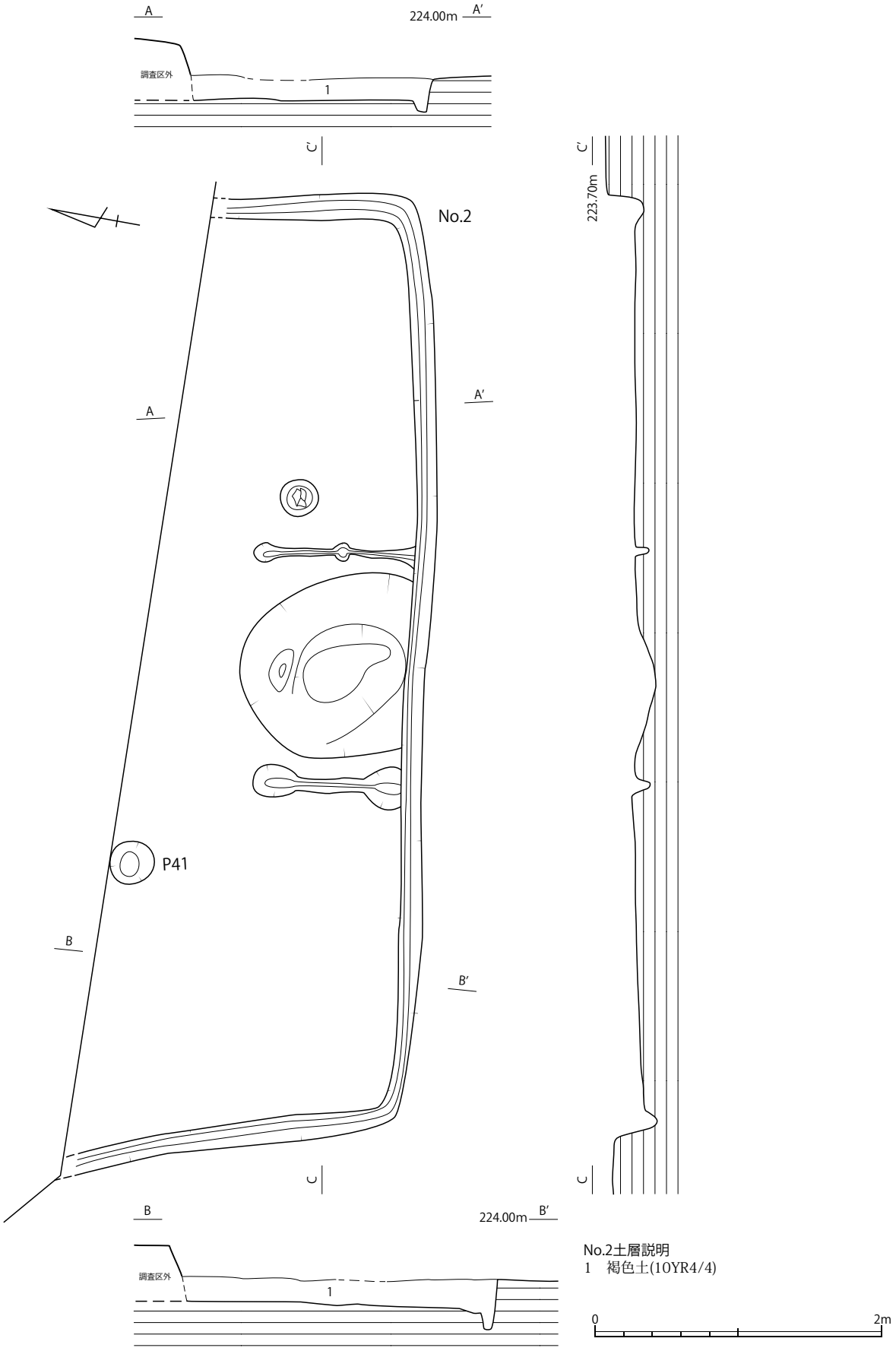
No.1土層説明
1　黒褐色土(10YR2/2)
2　明黄褐色土(10YR6/6)



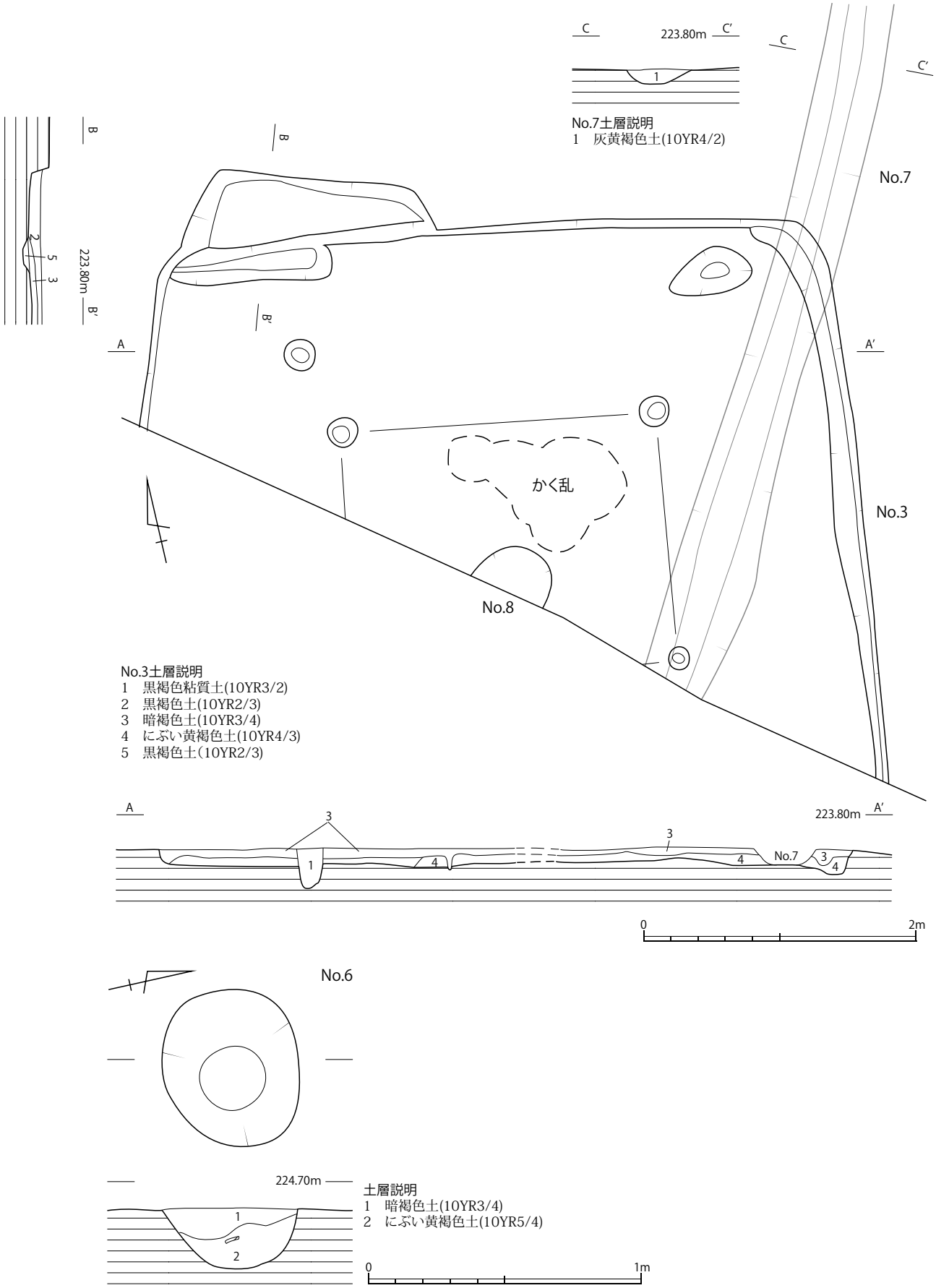
No.5土層説明
1　褐色砂質土(10YR4/4)(No.4の埋土)
2　黒褐色土(10YR2/2)(No.1の埋土)
3　暗褐色土(10YR3/4)
4　黒褐色粘質土(10YR2/3)　(No.5の埋土)

0　2m

第12図　友松3号遺跡　2区No.1・4・5実測図(1:40)



第13図　友松3号遺跡　2区No.2実測図（1：40）



第14図　友松3号遺跡　2区No.3・6～8実測図（No.3・7・8-1：40、No.6-1：20）

りのため図示しなかった。こちらも中世に掘られた溝の可能性が高い。

No.5（SK）（第12図、図版5）

No.5は2区 No.1（SB）の西半に掘り込まれた土坑である。平面形は隅丸の長方形でNo.6の溝状遺構により西半が、また南半は風倒木による攪乱により削平されている。南北方向の長軸約1.4ｍ、東西方向の短軸約0.9ｍ、深さ約0.25ｍで埋土は暗褐色土および黒褐色粘土である。遺物は土師器の小片のみのため図示しなかった。住居内に掘り込まれた土坑と考えられるが焼土などは検出されず詳しい性格は不明である。

No.6（SK）（第14図、図版5）

No.6は2区 No.4の西側に位置する土坑で、長軸約0.6ｍ、短軸約0.5ｍ、深さが約0.2ｍ、埋土は暗褐色土および黒褐色粘土である。遺物は土師器などを出土したが小片のため図示しなかった。古墳時代の土坑で周囲の柱穴上ピット出土したが上面の削平が著しく遺構の性格は不明である。

No.7（SD）（第14図、図版5）

No.7は2区 No.3（SB）の東半を掘り込む南北方向の溝状遺構で、南北ともに調査区外に延びる。検出長約6.3ｍ、東西方向の幅約0.35ｍ、深さ約0.1ｍで埋土は灰黄褐色土である。遺物は鍋口縁部の破片と東播系鉢が出土している。

No.8（SK）（第14図、図版5）

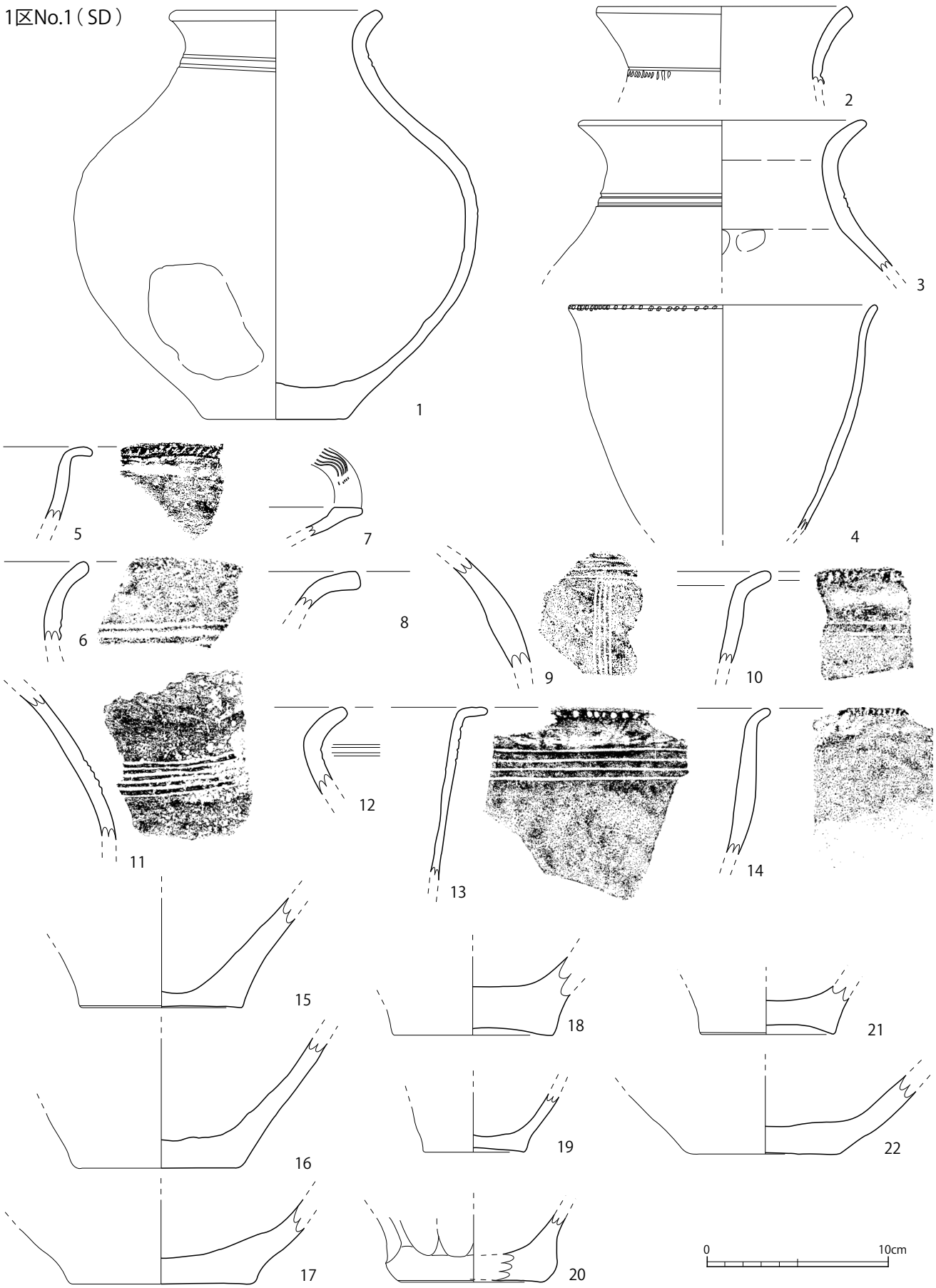
No.8は2区 No.3（SB）の中央南側に掘り込まれた土坑である。平面形は円形と考えられるが南半は調査区外のため完掘していない。直径約0.5ｍ、深さ約0.2ｍで埋土は暗褐色土および黒褐色粘質土である。遺物はほぼ完形の土師質土器の皿を出土したほかは、いずれも小片ばかりのため図示しなかった。No.3住居内中央には位置するが、出土遺物から中世に掘り込まれた土坑と考えられる。

柱穴状ピット（P40）（第3図）

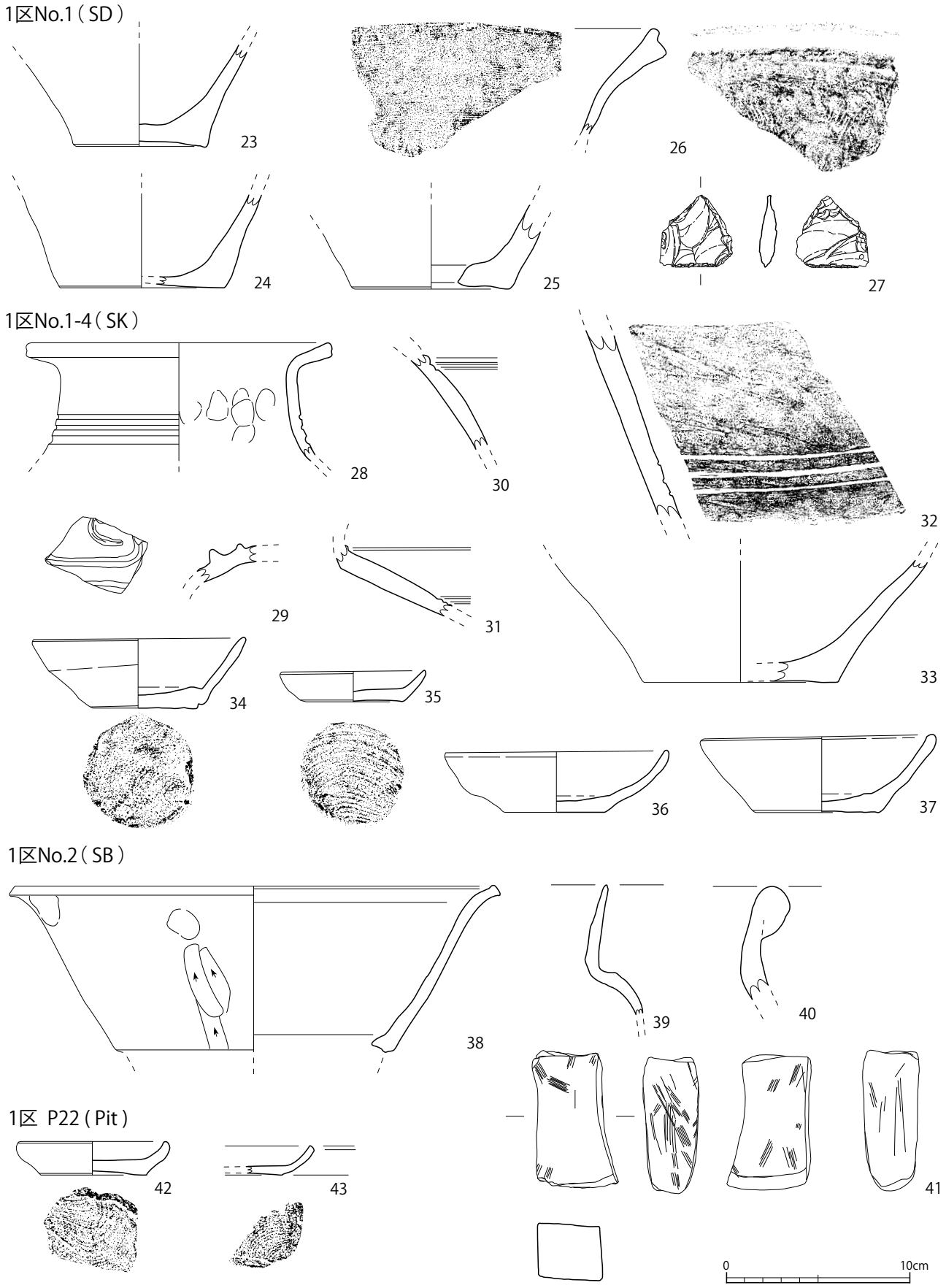
2区からも多くの柱穴状ピットが検出されているが建物跡などの明瞭な平面プランを復原できるものはなかった。出土遺物はP40が2区 No.2の東側に位置し、底部に糸切り痕をもつ土師質土器の皿底部を出土したが、そのほかの柱穴状ピットで出土したものは器形不明の小片ばかりで図示していない。ピットに含まれる遺物はほとんどが中世以降のものだが土坑 No.6周辺の P31および P33からは土師器の破片が出土している。

遺構に伴わない遺物（第19図）

2区の遺構に伴わない遺物のうち図示できたものは、2区全体表土剥ぎ後の掘り下げ中に出土した80の弥生土器底部のみで流れ込みによるものと考えられる。

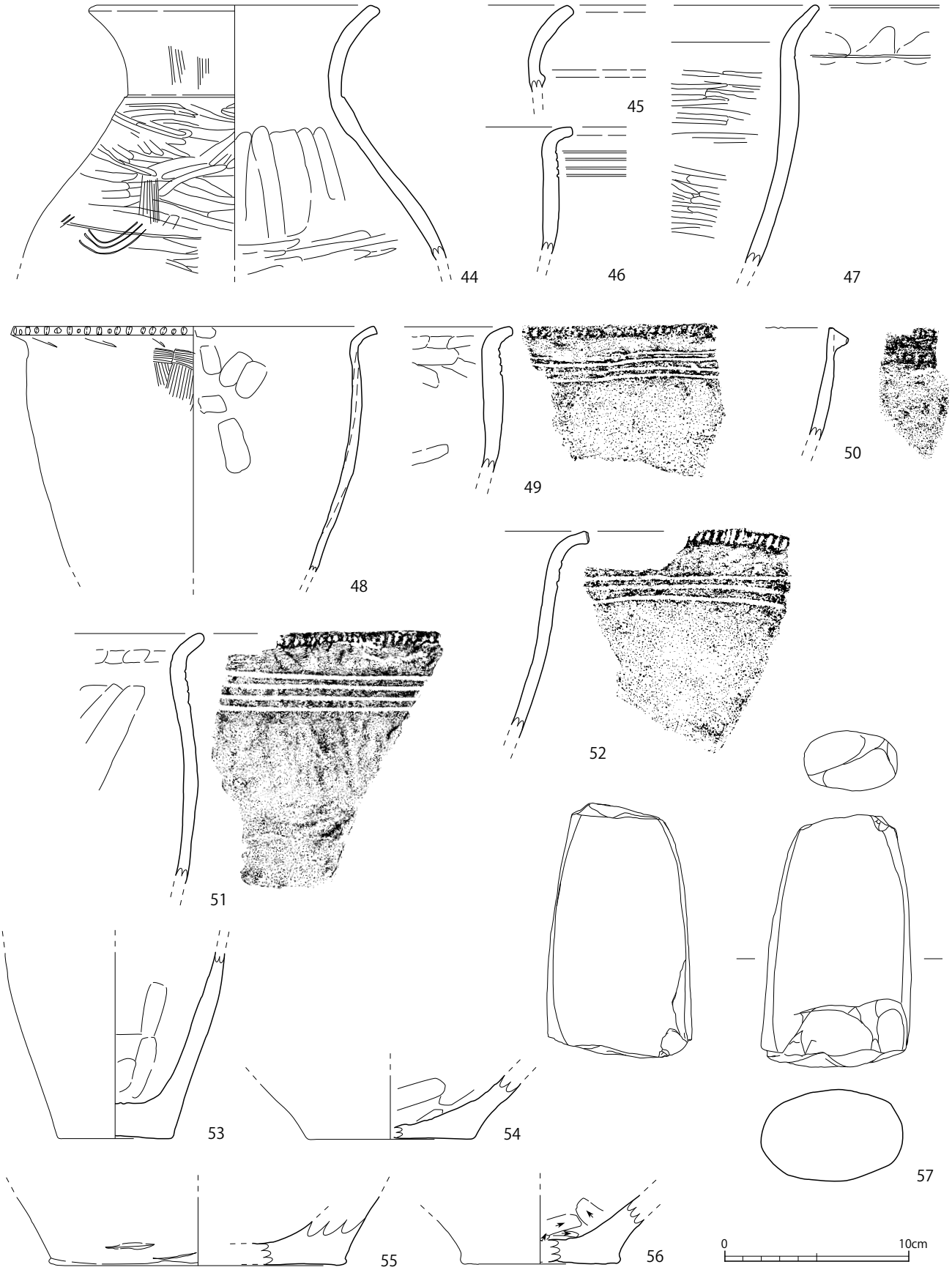


第15図　友松3号遺跡　出土遺物実測図1（1：3）

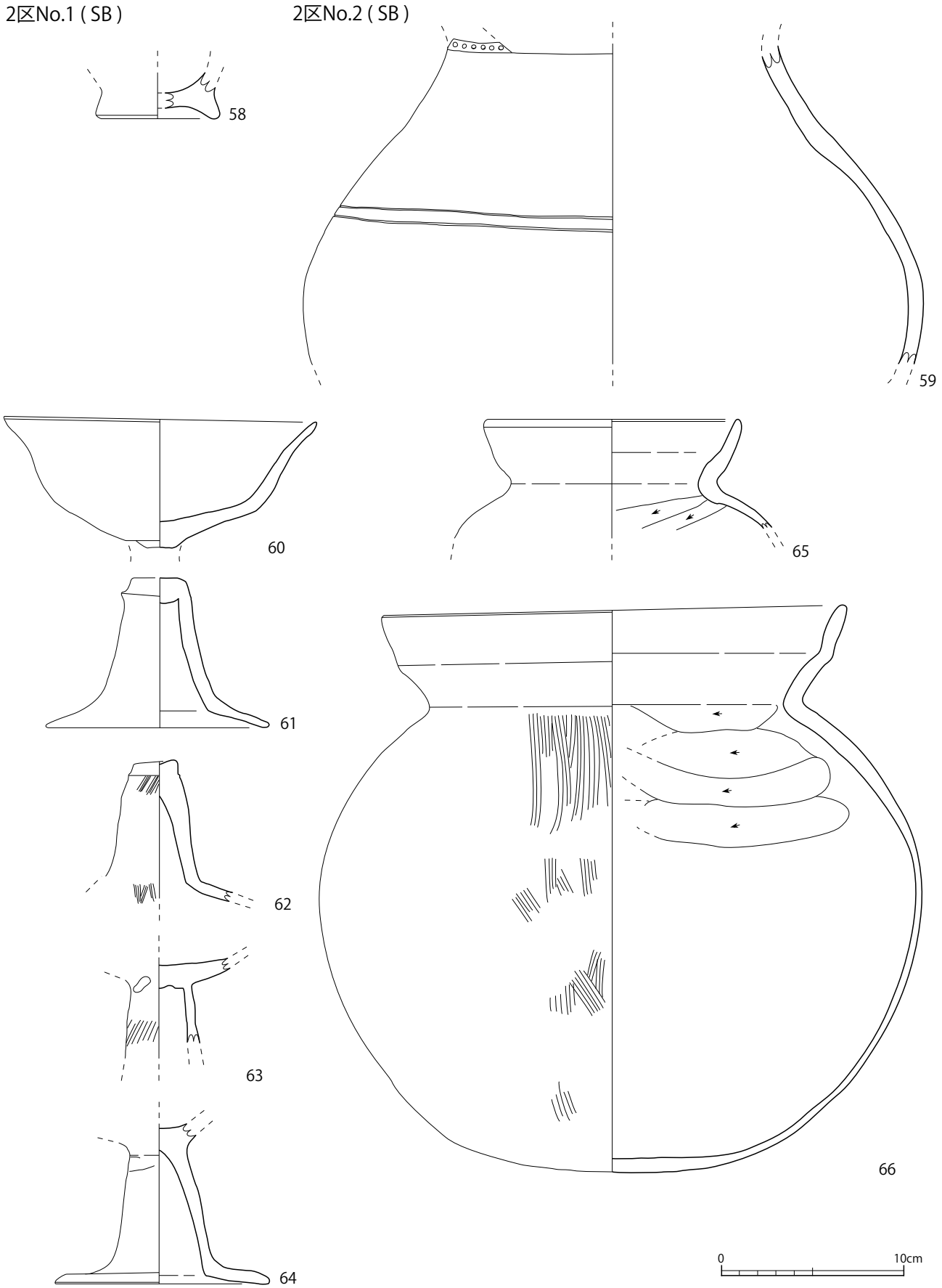


第16図　友松3号遺跡　出土遺物実測図2（1：3）

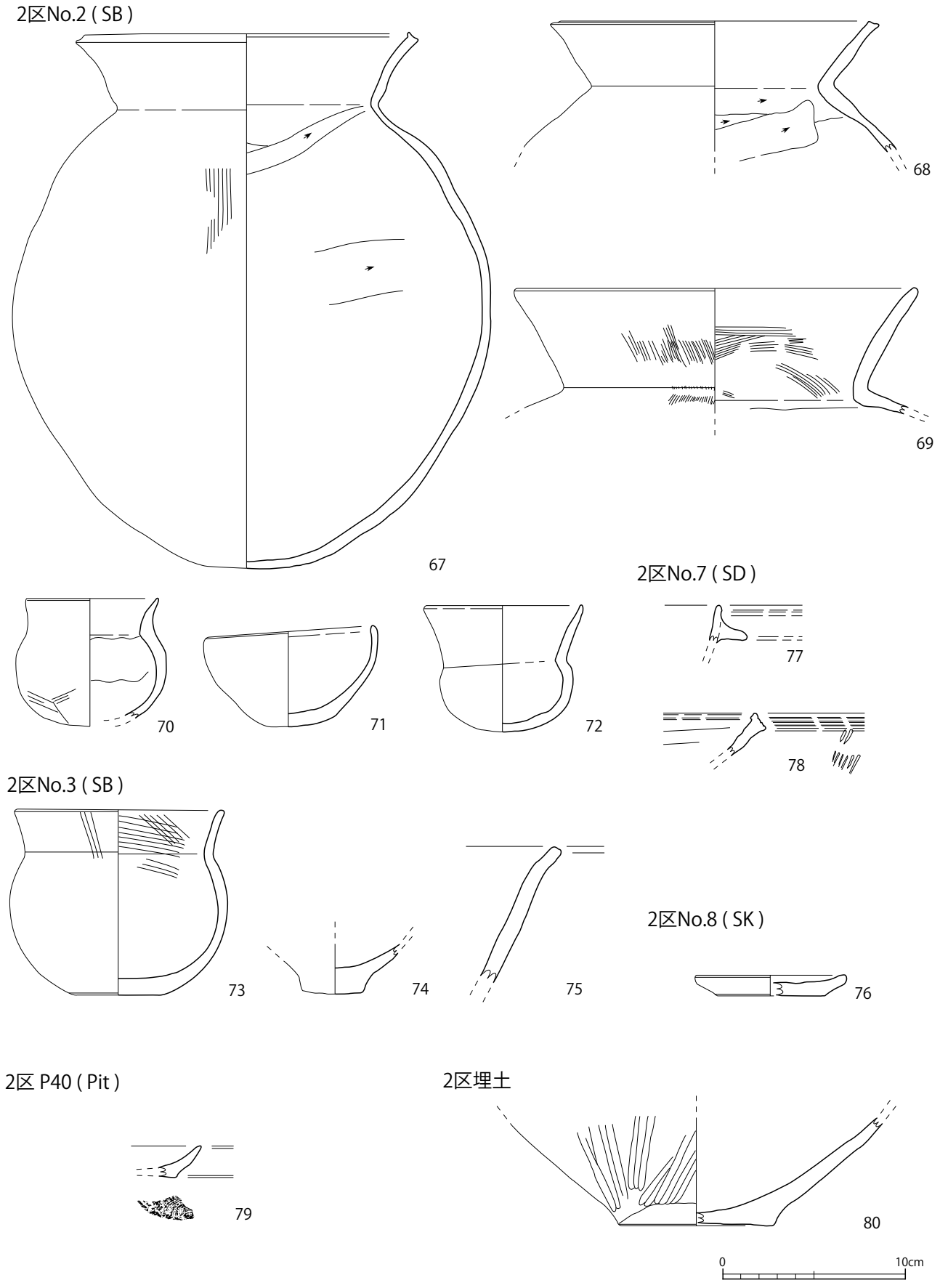
1区No.3（SD）



第17図　友松3号遺跡　出土遺物実測図3（1：3）



第18図　友松3号遺跡　出土遺物実測図4（1：3）



第19図　友松3号遺跡　出土遺物実測図5（1：3）

第２表　友松３号遺跡出土遺物観察表

（　）は復元値

番号	出土地点	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
1	1 区 No1　床直	弥生土器	壺		(11.8)	22.5	7.8	外：ナデ　沈線文 内：ナデ	粗	良	にぶい橙	外面：黒斑
2	1 区 No1-1	弥生土器	壺	口縁	13.8	—	—	外：ナデ　刺突文　沈線内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	橙	
3	1 区 No1	弥生土器	壺	口縁	15.8	—	—	外：ナデ　沈線（２条） 内：ナデ　指頭圧痕	密(白色砂粒を多く含む)	良	橙	
4	1 区 No1-1	弥生土器	甕	口縁	(16.6)	—	—	外：刻み目文 内：ナデ	密	良	外：浅黄 内：浅黄橙 断面：浅黄橙	
5	1 区 No1	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外：ナデ　刻み目文 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：暗褐 内：浅黄橙 断面：にぶい橙	
6	1 区 No1　下層	弥生土器	壺	口縁	—	—	—	外：ナデ　沈線文（２条か） 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	浅黄	
7	1 区 No1	弥生土器	壺	口縁	—	—	—	内：波状文	密(白色砂粒を多く含む)	良	にぶい黄橙	
8	1 区 No1　下層	弥生土器	甕か壺	口縁	—	—	—	外：ナデ　塗朱か 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	橙	弥生前期
9	1 区 No1-1	弥生土器	壺	体部	—	—	—	外：沈線 内：ナデ	密	良	外：にぶい橙 内：黒 断面：にぶい黄橙	
10	1 区 No1-1	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外：刻み目文　沈線 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：橙 内：浅黄橙 断面：浅黄橙	
11	1 区 No1　下層	弥生土器	甕か壺	体部	—	—	—	外：削り出し突帯 内：ナデ	密	良	外：暗褐 内：暗褐 断面：橙	弥生前期
12	1 区 No1	弥生土器	甕か壺	口縁	—	—	—	外：ナデ　沈線（２条） 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	橙	
13	1 区 No1	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外：刻み目　沈線（４条）	密	良	外：黒褐　浅黄 内：浅黄 断面：浅黄	弥生前期
14	1 区 No1　下層	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外：刻み目文　ナデ 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	橙	弥生前期
15	1 区 No1　下層	弥生土器	甕か壺	底	—	—	9.0	外：ナデ 内：ケズリナデ消し	粗(1 ～ 3mm 大の砂粒を多く含む)	良	浅黄	
16	1 区 No1　下層	弥生土器	甕か壺	底	—	—	9.4	外：ナデ 内：ケズリナデ消し	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：橙 内：淡黄 断面：淡黄	
17	1 区 No1	弥生土器	甕か壺	底	—	—	10.0	ナデ	密(1 ～ 3mm 大の砂粒を多く含む)	良	淡黄	
18	1 区 No1　下層	弥生土器	甕か壺	底	—	—	8.8		粗(1 ～ 3mm 大の砂粒を多く含む)	不良	外：橙 内：暗褐 断面：暗褐	
19	1 区 No1　下層	弥生土器	甕か壺	底	—	—	5.6		密(1mm 大白色砂粒含む)	普通	にぶい橙	
20	1 区 No1-1	弥生土器	甕か壺	底	—	—	(8.2)	外：ナデ　指頭圧痕 内：ナデ　ヘラケズリ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：にぶい黄橙＋橙 内：にぶい黄橙 断面：にぶい黄橙	
21	1 区 No1　下層	弥生土器	甕か壺	底	—	—	7.3		粗(1 ～ 3mm 大の砂粒を多く含む)	やや不良	外：橙 内：暗褐 断面：橙	
22	1 区 No1　下層	弥生土器	甕か壺	底	—	—	8.0	外：ナデ 内：指頭圧痕	密(1 ～ 3mm 大の砂粒を多く含む)	良	外：橙 内：にぶい黄橙 断面：橙	
23	1 区 No1-1	弥生土器	甕か壺	底	—	—	7.4	ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：褐 内：にぶい褐 断面：褐	
24	1 区 No1-1	弥生土器	甕か壺	底	—	—	(9.0)	ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙 断面：浅黄橙	
25	1 区 No1-1	弥生土器	甕か壺	底	—	—	(8.4)	ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：浅黄橙 内：浅黄橙 断面：にぶい黄橙	底部に穴
26	1 区 No1	土師質土器	鍋	口縁	—	—	—	ハケメ	密	良	外：にぶい黄橙 内：灰白 断面：黒	
27	1 区 No1-1	石製品	打製石刃		縦 3.9	横 3.9	厚 0.8					13.79g　安山岩
28	1 区 No1-4	弥生土器	壺	口縁	(16.6)	(6.1)	—	外：ナデ　沈線文（3条か） 内：ナデ　指頭圧痕	密(1mm 大の砂粒を含む)	不良	灰白	
29	1 区 No1-4	弥生土器	壺	口縁	—	—	—	内：貼付突帯　沈線	密	良	外：黒 内：にぶい黄橙 断面：にぶい黄橙	弥生前期
30	1 区 No1-4	弥生土器	壺か甕	体部	—	—	—	外：ナデ　沈線（３条か） 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：にぶい赤褐 内：橙 断面：橙	
31	1 区 No1-4	弥生土器	壺	体部	—	—	—	外：削り出し突帯 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙 断面：黒	弥生前期
32	1 区 No1-4	弥生土器	壺か	体部	—	—	—	外：ヘラミガキ　沈線（３条） 内：ヘラミガキ	密(白色砂粒を多く含む)	良	橙	
33	1 区 No1-4	弥生土器	甕か壺	底	—	—	(10.6)		密(砂粒を多く含む)	やや不良	灰白	
34	1 区 No1-4	土師質土器	坏	—	11.5	3.8	6.0	ナデ	密	良	淡黄	底部糸切り痕
35	1 区 No1-4	土師質土器	皿	—	7.8	1.7	5.5	ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	にぶい黄橙	底部糸切り痕
36	1 区 No1-4	土師質土器	坏	—	12.0	3.3	5.5	ロクロナデ	密	良	浅黄	底部糸切り痕
37	1 区 No1-4	土師質土器	坏	—	12.4	4.2	6.8	ナデ	密	良	橙	底部糸切り痕
38	1 区 No2	土師器	高杯	口縁	(26.0)	—	—	外：ヘラケズリ　ナデ　指頭圧痕 内：ナデ	密	良	橙	

番号	出土地点	器種	器形	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
39	1 区 No2	土師器	壺か	口縁	—	—	—	外：ナデ　ハケメ 内：ナデ　ハケメ　ケズリ	密	良	外：淡黄 内：淡黄 断面：褐	古式土師器か
40	1 区 No2 検出面	備前焼	壺か	口縁	—	—	—	ナデ	密	良	外：灰 内：灰 断面：灰　赤褐	
41	1 区 No2	石製品	砥石	—	縦 7.5	横 4.5	厚 3.0					134.69g
42	P22	土師質土器	皿	—	(8.0)	1.8	(5.8)	ナデ	密	良	橙	底部糸切り痕
43	P22	土師質土器	皿	—	—	1.6	—	ナデ	密	良	橙	底部糸切り痕
44	1 区 No3	弥生土器	壺	口縁	(15.8)	(13.7)	—	外：ナデ　ハケメ　ミガキ　重弧文 内：ナデ　強いナデ　ミガキ	密	良	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙 断面：にぶい橙	
45	1 区 No3	弥生土器	壺	口縁	—	—	—	ナデか	密	良	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐 断面：にぶい黄橙	
46	1 区 No3	弥生土器	甕	口縁	—	(6.9)	—	外:刻み目文　沈線（4条）　ナデ 内：ナデ	普通(1 ～ 2㎜大の砂粒を含む)	良	外：にぶい橙 内：にぶい橙 断面：浅黄橙	外面：スス付着
47	1 区 No3	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外：ナデ　指頭圧痕沈線 内：ミガキ	粗(1 ～ 2mm大砂礫含む)	良	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙 断面：灰白	
48	1 区 No3	弥生土器	甕	口縁	(20.0)	—	—	外：ナデ　ハケ　刻み目文 内：ナデ　ハケ　指頭圧痕	普通	不良	外：灰褐 内：灰白 断面：灰白	弥生前期
49	1 区 No3	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外:刻み目文　沈線（4条）　ナデ 内：ナデ	粗(2mm 大の砂粒を多く含む)	良	外：にぶい黄橙 内：橙 断面：橙	
50	1 区 No3	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外：ナデ　刻み目文 内：ナデ	粗(1 ～ 2mm大砂礫含む)	良	外：にぶい橙 内：橙 断面：橙	
51	1 区 No3	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外:刻み目文　沈線（4条）　ナデ 内：ナデ	粗(2mm 大の砂粒を多く含む)	良	にぶい黄橙	外面：スス付着
52	1 区 No3	弥生土器	甕	口縁	—	—	—	外:刻み目文　沈線（3条）　ナデ 内：ナデ	粗(2mm 大の砂粒を多く含む)	良	浅黄橙	
53	1 区 No3	弥生土器	—	底	—	—	6.2	ナデ	粗(砂粒多く含む)	良	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙 断面：にぶい黄橙	
54	1 区 No3	弥生土器	甕か壺	底	—	—	(9.0)	ナデ	密	良	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙 断面：灰黄褐	
55	1 区 No3	弥生土器	甕か壺	底	—	—	(16.2)	外：ヘラナデ 内：ナデ	密	良	外：灰黄 内：浅黄 断面：灰黄	
56	1 区 No3	弥生土器	甕か壺	底	—	—	(8.6)	ナデ	密	良	外：浅黄橙 内：にぶい橙 断面：にぶい黄橙	
57	1 区 No3	石製品	磨製石斧		縦 14.0	横 7.9	厚 5.0					900 g
58	2 区 No1	弥生土器	—	底	—	—	6.3	ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	橙	漆が付着
59	2 区 No2 拡張	弥生土器	壺	体部	—	—	—	外：ナデ　沈線（2条）刺突文 内：ナデ	密	良	灰褐	弥生前期
60	2 区 No2	土師器	高杯	坏	(17.0)	—	—	ナデ	密	良	橙	
61	2 区 No2	土師器	高杯	脚	—	—	(12，0)	ナデ	密(石英など砂粒を多く含む)	良	灰黄褐	
62	2 区 No2	土師器	高杯	脚	—	—	—	外：ナデ　ハケメ 内：ナデ　絞り	密	良	浅黄橙	
63	2 区 No2	土師器	高杯	脚	—	—	—	外：ナデ　ハケメ　指頭圧痕 内：絞り	密	良	浅黄	
64	2 区 No2	土師器	高杯	脚	—	—	11.7	外：ナデ 内：ケズリナデ消し	密	良	淡黄	
65	2 区 No2	土師器	壺	口縁	(13.6)	—	—	外：ナデ 内：ナデ　ケズリ	密	良	浅黄橙	山陰系末期
66	2 区 No2	弥生土器	壺	—	(25.0)	30.9	—	外：ナデ　ハケメ 内：ケズリ	密	良	外：橙＋淡黄 内：淡黄 断面：淡黄	山陰系末期
67	2 区 No2	土師器	壺	—	17.7	29.1	—	外：ハケメナデ消し 内：ケズリ	密	良	黄橙	外面：スス付着
68	2 区 No2	土師器	壺	口縁	(16.8)	—	—	外：ナデ 内：ケズリ　ナデ	密	良	橙	
69	2 区 No2	土師器	壺	口縁	(21.6)	—	—	外：ハケメナデ消し 内：ハケメ	密	良	黄橙	
70	2 区 No2	土師器	鉢	—	7.2	7.0	—	ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：橙 内：橙　にぶい黄橙 断面：浅黄橙	ミニチュア土器
71	2 区 No2	土師器	鉢	—	(9.2)	5.5	—	ナデか	密(石英など砂粒を多く含む)	良	外：にぶい黄褐 内：灰 断面：淡黄	ミニチュア土器
72	2 区 No2	土師器	壺	—	8.5	6.9	—	ナデ	密	良	橙	ミニチュア土器
73	2 区 No3-1	土師器	鉢	—	11.2	10.1	5.0	ハケメ	密(白色砂粒を多く含む)	良	橙	ミニチュア土器
74	2 区 No3	弥生土器	鉢	底	—	—	3.3	ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：橙 内：浅黄橙 断面：褐	内側底部に工具による線
75	2 区 No3	弥生土器	鉢	口縁	—	—	—	ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：にぶい黄褐色 内：褐＋橙 断面：にぶい黄橙	
76	2 区 No8	土師質土器	皿	—	(8.2)	1.1	(5.9)	ナデ	密	普通	淡黄	底部糸切り痕
77	2 区 No.7	土師質土器	鍋	—	—	—	—		密	良		
78	2 区 No.7	陶器	鉢	—	—	—	—		密	良		東播系鉢
79	P40	土師質土器	皿	—	—	1.7	—	ナデ	密	良	浅黄橙	底部糸切り痕
80	2 区	弥生土器	甕か壺	底	—	—	(8.6)	外：ヘラミガキ 内：ナデ	密(白色砂粒を多く含む)	良	外：にぶい黄橙 内：灰褐 断面：黒色	

Ⅴ　ま　と　め

1. 友松２号遺跡について

1区・2区から弥生時代の溝状遺構 No.101・No.208と中世の溝状遺構 No.102を検出した。No.101・No.208は1区・2区と連続し、南東及び北西方向にそれぞれ延伸する。かなり深掘りの溝で、調査区外の試掘トレンチでも同様な色の層がめぐる様相を検出しており弥生時代の環濠の可能性がある。中世の溝はNo.102の延長線上に2区からNo.209を検出した。ただし付近の試掘調査でも浅い窪みを残すのみでNo.209も削平が著しいため、No.102との連続性は不明である。また4区の溝状遺構 No.401と2区の No.102は方位が並行することから中世の敷地を区画した溝の可能性がある。

1区から4区にかけ複数の土坑が確認されたが、2区・3区は削平が著しく、遺物も流れ込みによるものである。1区では溝状遺構 No.101、No.102の近くで2基の土坑が検出され、このうち1区 No.102北西側の土坑 No.103は断面袋状で中世末期の鍋などを出土した。1区西側の土坑 No.107は遺物が少なく時期不明である。2区・3区の土坑は後世の削平が著しく周辺の柱穴状ピットとの関係も不明で、明確な住居プランは復原できなかった。4区の土坑はNo.402から弥生時代中期後半の壺などを出土、No.403は古墳時代の遺物が出土したが、不整形で風倒木による攪乱土坑と推測される。

弥生時代の遺物をともなう遺構は溝状遺構 No.102、No.208と土坑 No.402があるが、No.102出土のものは中世溝への流れ込みである。No.208の弥生土器のみ埋土下層から出土したが底部のみで時期の判断は難しい。No.102混入土器や No.402出土の弥生土器が中期後半頃のものであることから同時期と考えておきたい。また No.403からは唯一、古墳時代の須恵器や土師器の破片が出土したが、風倒木によるものと考えられ人工のものではない。中世の遺物については3区埋土となる遺物包含層から出土した中世前半頃のものと1区､4区の溝状遺構等から出土した中世後半頃のものとに分かれる。中世前半の遺物では、鎬蓮弁文をもつ青磁や青白磁の合子の蓋、白磁の壺といった奢侈品が多く出土しており、一般集落とは異なった性格を持つと考えられる。また、中世後期の遺物の中にも瀬戸の香炉、天目茶碗などが出土していることから宗教施設や有力者の居住なりの可能性が考えられる。

2. 友松３号遺跡について

1区で確認された主な遺構は弥生時代の溝状遺構 No.1, No.3と古墳時代の竪穴住居 No.2、溝状遺構 No.1を一部掘り込む中世の土坑 No.1–4である。1区の No.1は溝としては幅広で、大型の土坑の可能性もあるが、遺構が北西の調査区外まで延伸すること、規模は異なるが同じ弥生時代前期の遺物を出土する溝状遺構 No.3が検出されていることから一連の溝と考えた。古墳時代の方形竪穴住居 No.2は西半が調査区外となり、方形と推測されるが柱穴の位置や並びは不明である。出土遺物は古墳時代前期の特徴をもつ土師器で、2区から検出された3軒の方形竪穴住居と同時期と考えられる。また No.1を掘り込む中世の土坑

No.1–4は上面が削平され残りが悪く、周囲から検出された柱穴状ピットも同様に削平されており、明確な建物跡を復原できるものは検出されなかった。

2区の主な遺構は古墳時代の方形竪穴住居No.1、No.2、No.3と土坑No.6、中世の溝状遺構No.4、No.7である。No.1の方形竪穴住居は住居中央南北に2つの柱穴があり、これらが主柱穴と考えられる。遺物は小片ばかりで各時代の遺物が入り混じり年代の判断は難しいが、中央2本の主柱穴である点から周辺の方形竪穴住居とほぼ同時期か、やや後出する可能性がある。No.2は出土遺物が最も多く、古墳時代前期と弥生時代終末期の遺物を出土した。遺構全体を検出しておらず主柱穴は不明だが、壁溝に近接する土坑と2条の溝をもつ住居で、2条の溝は板材のような薄い部材を打ち込んだ痕と考えられる。土坑の位置からカマドなどの用途も想定されるが、焼土はなく性格不明である。No.3の方形竪穴住居も遺構南半が調査区外のため全容は不明で、No.7の溝やNo.8の土坑などによって攪乱され残りが良くない。出土遺物も攪乱された小片ばかりで図示していないが、土師器の小片が出土していることから、古墳時代前期の遺構と考えられる。また遺構を攪乱する溝状遺構No.7からは中世前半頃のものと考えられる土鍋と東播系鉢が出土している。土坑No.8はNo.3竪穴住居の中心と考えられる場所に位置するが、土師質土器の皿を出土しており後世の掘りこみと考えられる。また検出された柱穴状ピットの並びから4本柱を主柱穴としていたと推測される。

本遺跡では1区No.1とNo.3から弥生時代前期の遺物を出土した。土器は甕口縁部が逆L字状口縁に刻み目をもつのが特徴で、壺は胴部に重弧文をもつものや内側に粘土紐を張り付けた口縁部などが出土している。1区No.2や2区No.2の方形竪穴住居からは古墳時代前期の土師器が出土しているが、須恵器は出土していない。

3. まとめ

友松2号遺跡の溝状遺構No.101と土坑No.402から弥生時代中期後半の土器、4区の土坑No.403から古墳時代中期頃の須恵器が出土しているのに対し、3号遺跡からは1区のNo.1・No.3で前期の弥生土器を出土、2区の方形竪穴住居No.2で古墳時代前半の土師器が出土しており、遺構によって年代が異なる。調査範囲が狭小かつ変則的なため単純に比較はできないが、各時代の遺物が断続的に一定量ずつ出土していることから、友松2・3号遺跡の位置する平野部に近い微高地が、時代を通じ集落を営む好適地であったことがうかがえる。周辺からは友松遺跡、友松4号遺跡でも弥生時代や中世の遺構・遺物が見つかっており、この一帯に同時期の集落が広がっていたと考えられる。

図　　版

友松２・３号遺跡から北東の竜王山系をのぞむ

a　遺跡調査前風景（南東から）

b　遺跡完堀風景（南東から）

a　１区溝状遺構 No.101・102
完掘（南から）

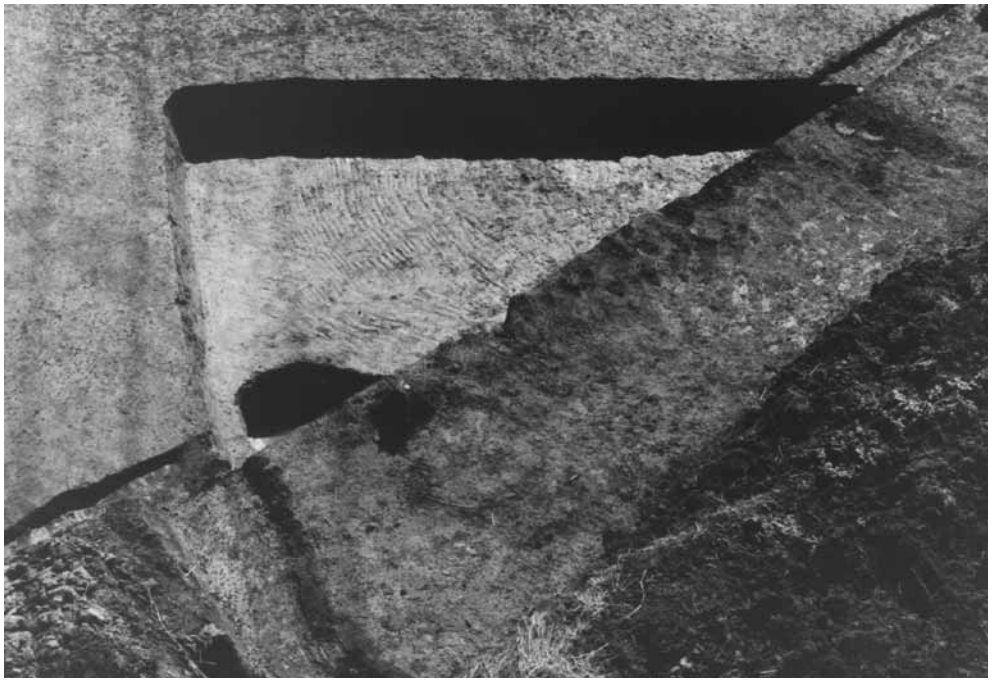
b　１区溝状遺構 No.101・102
断面（南から）

c　１区土坑 No.103（北から）

a　1 区完掘全景（南西から）

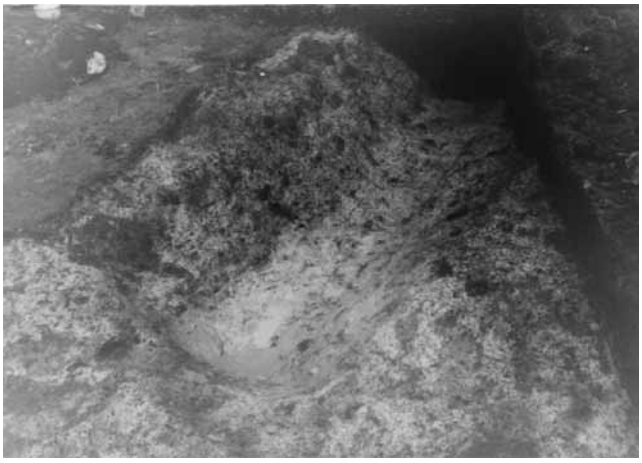
b　2 区完掘全景（南西から）

a　１区溝状遺構 No.1
・土坑 No.1-4 完掘
（南西から）



b　１区竪穴住居跡 No.2
完掘（北西から）

c　１区住居内土坑 No.4 完掘（南東から）

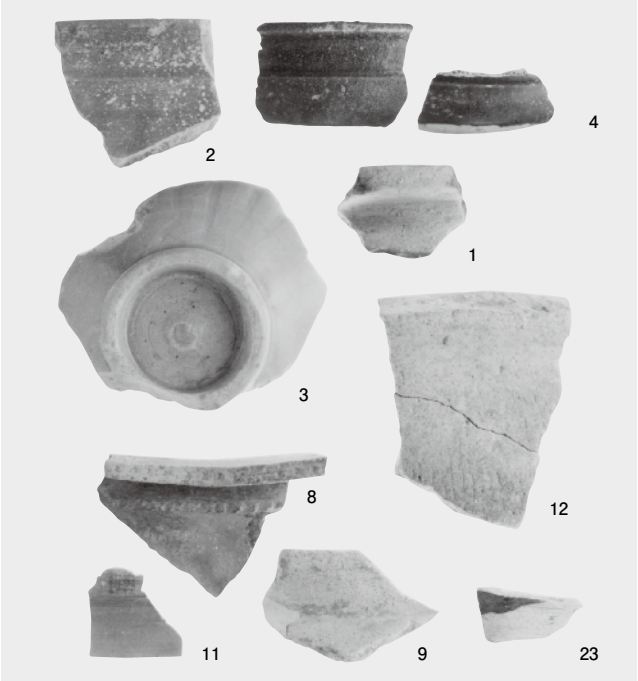


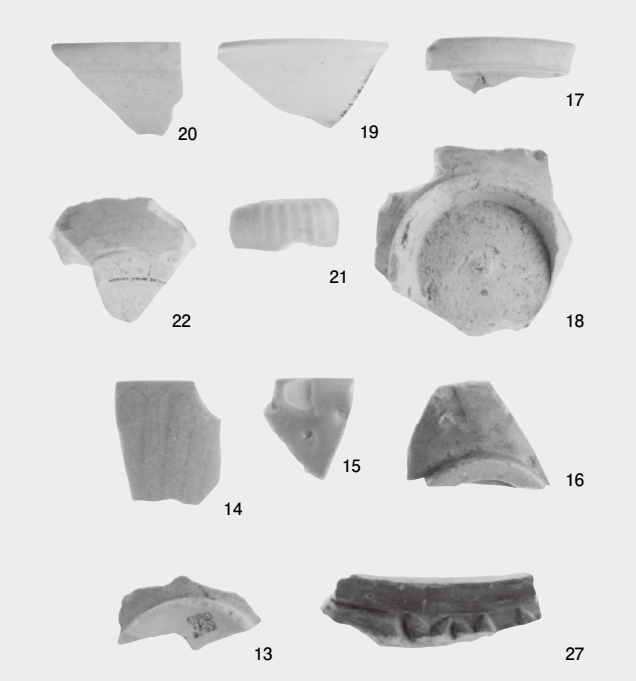
d　１区溝状遺構 No.3 完掘（南西から）

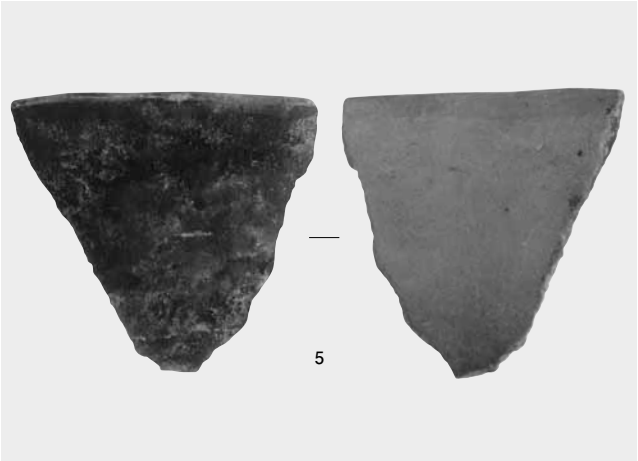
a　2 区竪穴住居跡 No.1
・溝状遺構 No.4
・土坑 No.5 完掘
（南西から）

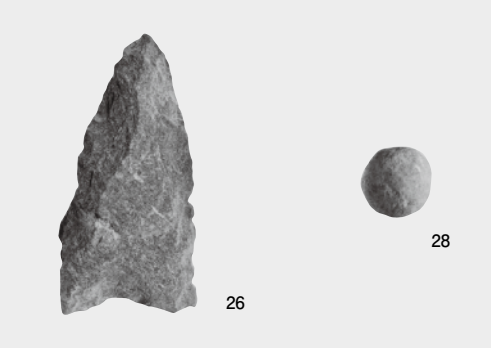
b　2 区竪穴住居跡 No.2 完掘
（東から）

c　2 区竪穴住居跡 No.3
・溝状遺構 No.7 完掘
（北東から）

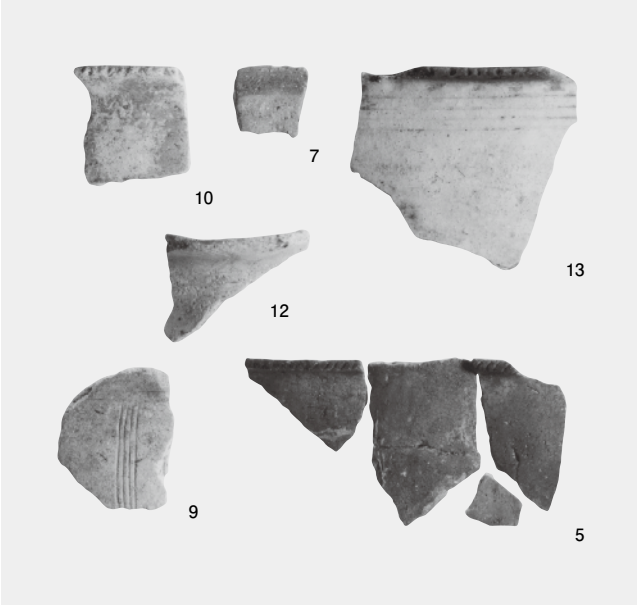


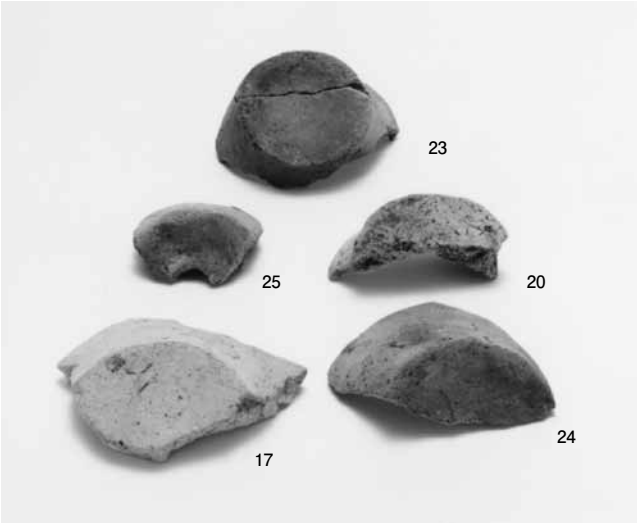


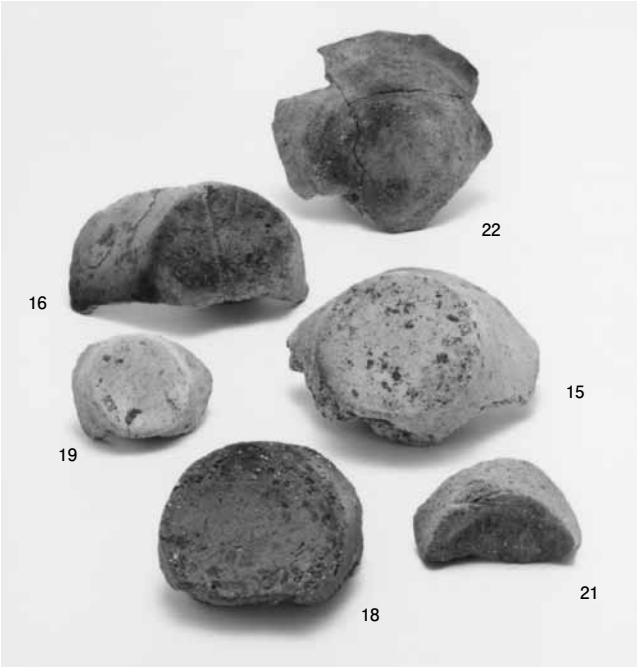




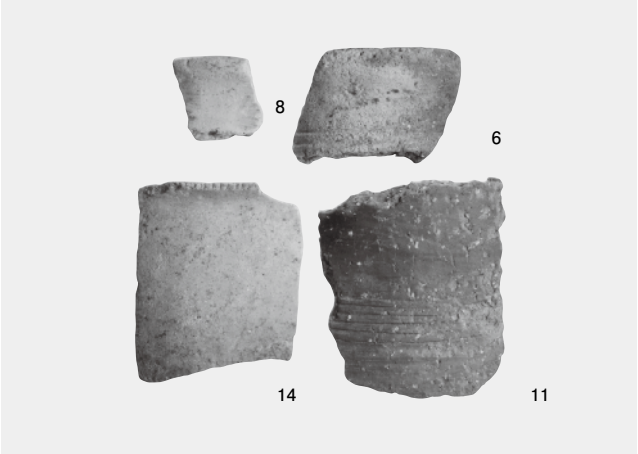
友松２号遺跡　出土遺物

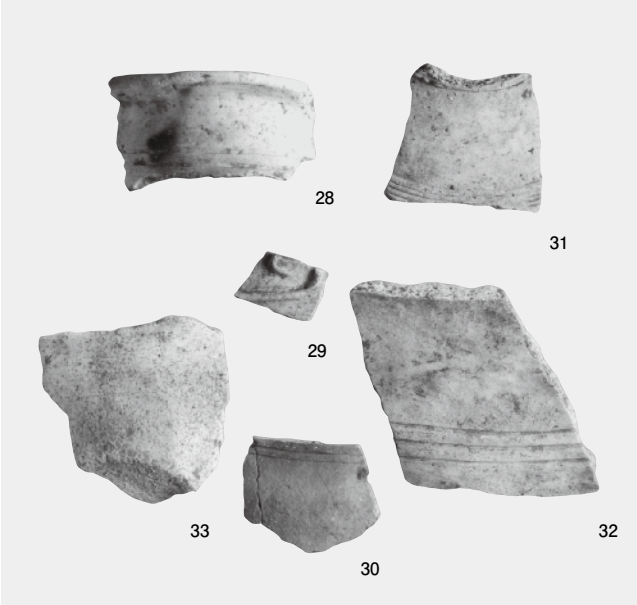


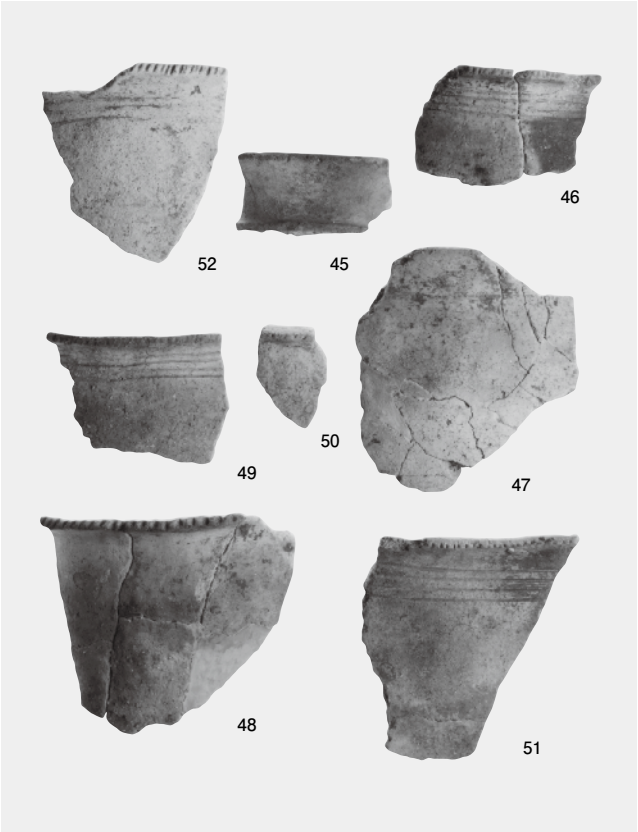




友松３号遺跡　出土遺物１

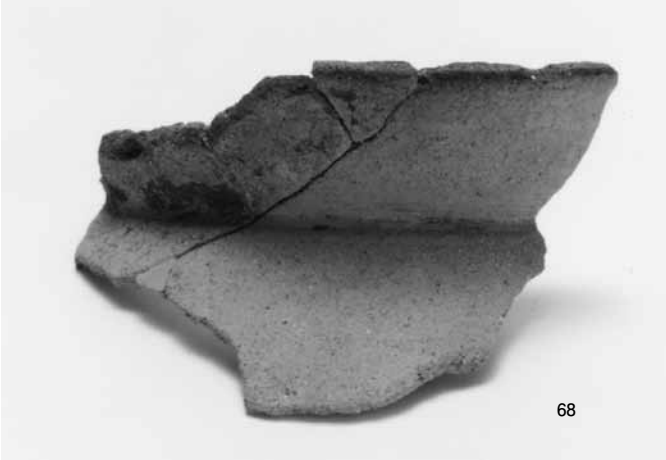


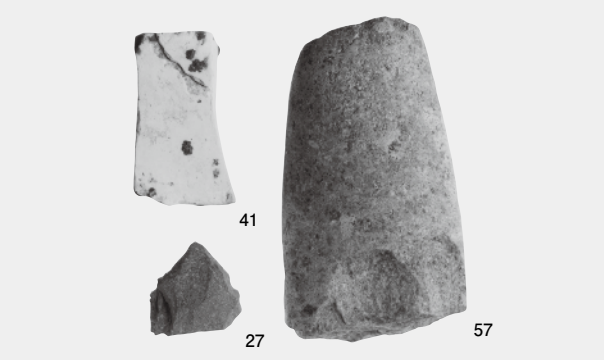




友松３号遺跡　出土遺物２

友松３号遺跡　出土遺物３





友松３号遺跡　出土遺物４

報　告　書　抄　録

ふりがな	ともまつに・さんごういせき
書名	友松２・３号遺跡
副書名	ビバーチェ寺家宅地造成工事に係る発掘調査
巻次	
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書
シリーズ番号	第48集
編集者名	津田真琴・杉原弥生
編集機関	東広島市出土文化財管理センター（東広島市教育委員会文化課調査係）
所在地	〒739-2201　広島県東広島市河内町中河内651番7号　TEL 082-420-7890
発行機関	東広島市教育委員会
所在地	〒739-8601　広島県東広島市西条栄町8番29号
発行年月日	西暦2014年3月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
ともまつにごういせき 友松２号遺跡	ひがしひろしましさいじょうちょう 東広島市西条町 じけ 寺家	34212	981	132° 43′ 29″	34° 26′ 07″	20120229 ～ 20120322	420	ビバーチェ寺家宅地造成工事
ともまつさんごういせき 友松３号遺跡	ひがしひろしましさいじょうちょう 東広島市西条町 じけ 寺家	34212	983	132° 43′ 28″	34° 26′ 06″	20130124 ～ 20130215	420.06	ビバーチェ寺家宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
友松２号遺跡	集落跡 包蔵地	弥生時代 中世	溝状遺構　1条 土坑　8基 溝状遺構　2条 性格不明遺構　1基	甕 壺 土師質土器 輸入陶磁器 鍋	特記事項無し
友松３号遺跡	集落跡 集落跡 包蔵地	弥生時代 古墳時代 中世	溝状遺構　6条 竪穴住居跡　4軒 土坑　4基	甕･壺 土師器 土師質土器 国産陶磁器	特記事項無し

要約

友松２号遺跡　本遺跡は、標高575mの龍王山から派生した低丘陵の南側と西条盆地の北側裾部が接する、標高約200mの平野部に立地する。主に弥生時代中期後半と中世の遺物が出土し、溝状遺構や土坑などが検出された。特に弥生時代の溝状遺構は環濠であった可能性がある。また第３区は中世前半の遺物の良好な包含地となっていたが明確な遺構は確認されなかった。

友松３号遺跡　友松２号遺跡のすぐ南側に立地する。主な遺構は弥生時代前期の溝状遺構と古墳時代の竪穴住居跡である。なお、中世前半頃の遺物を出土する溝状遺構も検出されている。これらのことから、友松２・３号遺跡の立地する西条盆地内の微高地は、各時代の集落が継続的に営まれており、各時代を通じて利用される好適地であったことがうかがえる。

東広島市教育委員会文化財調査報告書第48集

友松2・3号遺跡発掘調査報告書

発　行　日　平成 26(2014)年 3 月 28 日

編集・発行　東広島市教育委員会
〒 739-8601　広島県東広島市西条栄町 8 番 29 号

印　　刷　大東印刷株式会社
〒 723-0052　広島県三原市皆実 4 丁目 5 － 30